

3118



猛

虎

No 7091/1884



浮く直三の書名

のぞく

馬言執のぞく

は 抄のぞく

直三の何より



1907 51

夕雲草

天印書

正印書

定句星

本書は最初譯々直言と題せ
り紅葉先生の序文は改題前
に草せられし者に拘る

編者識

特51
844

猛
虎

目
録

- 一 官 吏 論
- 一 士 族
- 一 農 民
- 一 商 人
- 一 僧 侶
- 一 醫 者
- 一 教 員

- 一 一丁
- 一 一六丁
- 一 一九丁
- 一 二五丁
- 一 三二丁
- 一 三六丁
- 一 四二丁

1907

夕雲草

天印集

定也星

正

本書は最初譯々直言と題せ
り紅葉先生の序文は改題前
に草せられし者に拘る

編者識

猛虎

目錄

特51
844

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 教 | 醫 | 僧 | 商 | 農 | 士 | 官 | 總 |
| 員 | 者 | 侶 | 人 | 民 | 族 | 吏 | 論 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 四 | 三 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 二 | 五 | 二 | 九 | 六 | 一 | 一 | 一 |
| | 丁 | 丁 | 丁 | 丁 | 丁 | 丁 | 丁 |

- 一 政治家
- 一 書生
- 一 議員
- 一 代言人
- 一 壯士
- 一 改良家
- 一 婦人
- 一 新聞記者
- 一 藝娼妓
- 一 著述家

二

四九丁

五六丁

六二丁

六八丁

七二丁

七七丁

七九丁

八五丁

九〇丁

九八丁

猛虎

總論

譯々議史著



議史の元承喪申胸裡共無一物的の素寒貧兼陳腐漢よして當時の流
 行に拘る文明開化の何物たるを知らず而して其の文明開化てふ者ハ
 非但し構ひ者歟天堂に居る歟將た生意氣書生の製造せし者歟餘齋君
 の特有物歟ベリ氏の進物品歟否否知れり々々々其嘘辞歟眞言歟
 語歟否言歟何だか彼だか知らずと雖も嘗て其昔文明開化の講釋を承
 傳は進取競争の氣象に因て生じ自治活動の世界に育せらるゝ者よ
 して優勝劣敗自然淘汰の理窟をして遠慮會釋なく其力を逞ふせしむ
 るが文明開化の骨肉なり故に馬鹿野郎は其餓ゆるに任せ智者獨り勢

を得るが進歩の土臺なるを以て其人の奸物惡黨たるに論なく自由我儘得手勝手他人を壓倒するお巧なる者の貨幣の山を築きて糝車くらりくるまに乗り新道横町花街柳衢名所古跡樂城勝區と馳せ回り入てり則ち瓊室瑤宮綺羅錦繡美酒佳肴頗別嬪を擁して喃喃囁語を吐き苟も氣に喰ひさることあれば人間を澤庵にし鱈魚を乾肉ひものにするも亦得手勝手豈に怪むに足らんや之に反して仮令へ其人の正直律氣たるも腦味噌の少き連中は身代を欺騙師たんしの誤魔化まかす所となりて腮あごを繋つるし終り餓死する者多きは餘り珍しき事は非ずして新聞填草と爲す足らざるなりと今語を換へて之を復言すれば則ち文明開化の世界は優勝劣敗の世界よして智者の棲む可き世界なり愚者の居る可き世界よ非ざるなり開明の世界の固り愚者と容れざるなり若し愚者にして敢て之に居るも猶ほ柔弱なる子羊の豺狼の群に在るが如く赤子の力士連に入るが如

し必ず居るに堪へざるなり抑赤子の力たる蚕虱ひねるだも捫る能はず豈お方士の犢鼻褌たんとしを擔ぐに堪へんや況や西の海に敵する能はざるに於てをや然るも敢て其群其連に有て世を渡らんと欲せば抛殺する所となりて止まん耳豺狼の餌食となり終らん耳斯く力士の社會よの赤子を容れざると同じく開明の世界よの愚者を容れざる所以なり否な容れざるに非ずと雖も常に敗を取て敗又敗貧窮又窮窮又極て穴側あなばたお青氣を吹く固り其分天を怨むるも人を咎むるも天豈よ愚者を顧みんや人何ぞ馬鹿を對手あいてよせんや斃れて而後止やむの外恐くの妙案奇策あらざるあり故に社會の開明よ進むに隨て智者と愚者と彌々貧富の度を異にし富める者の益々富て天堂に登り愚者は日お貧一等を加へて終りに餓鬼地獄お墮落し去るや必せりと若し此理窟にして間違なしとせば下窮民の啡々飢え泣き呱呱寒に號ぶの哀聲多きは文明國の常敷上優

勝者の花を觀月を賞し雪ふ雨ふ常お鏗々鏘々の美聲多き開明社會の常敵將た乃公は即ち優勝者榮華を盡し贅澤を極むるの固り其分自由の音民權の聲の敢て聽くを欲せず若し敢て聽かしめんと欲せば乃ち攻道具を以て之を禁する耳亦何かあらん且つ啡々呱々の聲を發するは劣敗者の常徒に其活智なきを廣告披露する耳乃公豈に關せんや他は困難辛苦の百年も千萬年も堪忍すべし何ぞ他の痴氣を頭痛も病むの愚を學はんやと轉ふも死するも其者の勝手に任すは開明國の常態敵議史嘗て毛唐氏に聽く昔し周公殿政治を攝ねられし時は天下の利口連は一切合切舉用せられ獨り土百姓の其所を得る耳ならず牡丹芍藥菊の花麒麟鳳凰蚕虱の動植物に至るまで皆其所お安じて天下泰平家内安全無事息災枕を高ふし鼾聲を高ふして敢て懼るゝ者あしと是れ果して未開野蠻の結果なる歟抑我餘公も亦周公殿の如く一食お

三ひ聳汗を拭きて薩摩武士と談じ一浴お四ひ男根を藏ふて長州人と話し起て以て主を待ち尙ほ薩長土肥否日本帝國貧乏人あらんことを懼るゝにも拘らず休徵嘉瑞麟鳳龜龍の屬未だ全く至らずして戦々又競々心を變ゆる隙なく入ての則ち護衛兵常に門を守り出ての則ち警官殺車を護して其非常を戒むるも壯士狼人と聞て墨丸忽ち頂点に達し午砲の一聲を爆烈彈と誤りて細少年らも只一個の膽玉を潰ふし其畏怖心の已に瘡痍となりて癒ゆるの期なき否我餘公は仁愛殊も深く民を視る傷めるが如くなるまも拘はらず人民は平氣洒々其憂を憂へざる狀況ありて其薄情なる惡む可きも亦餘りありと云ふ可し嗚呼民の憂…獨り樂む…贅と貧…薄情又薄情窮又窮開明の結果…恐る可く警む可し啡々呱々の哀聲方に下界も滿ち鏗々鏘々の美聲常お天堂に轟く是れ果して文明の音聲歟開化の結果歟已お然り我國の文明開

化の親分國たるは得て知る可き耳然とも文明開化てふ者の善き者歟
 將た惡しき者歟以上の屁理屈議論おして大なる誤なしとせば文明
 の世界の薄情の世界なり依估偏頗世界なり馬鹿の爲めには恐る可き
 世界あり正直眞面目に爲すは損歟狡猾欺騙も働かざる可らざる歟眞
 面目お其愚を守ら末終お餓鬼道地極み陥りて腮を繫すの恐なき歟蓋
 し現今の社會の利口三分に馬鹿七分七分の馬鹿の劣敗して終み餓鬼
 道に陥り三分の利口は優勝して天堂に登る者とせば利口の爲めみの
 善た都會よきも馬鹿の爲めおは迷惑千萬なり蓋し文明てふ者は馬鹿
 退治の異名歟開化てふ者は貧乏殺しの別號か若し然りと仮定せば開
 明の世界の恐ろしき世界と謂はざる可らず然とも馬鹿の用の利口者
 を定むる標準耳元來馬鹿の人の屑よして餘り必用も感せされば文明
 開化てふ者の手に掛りて死するも可なり寧ろ速に死して米價の下落

を促かし以て三分の利口を助け彌を其開明の度を進ましめ兼て日本
 國をして晉楚の富國たらしむるお若かざる歟否々彼れ利口連は馬鹿
 組の日の車に乗りて餓鬼道地極み行き僅に青き餘喘を吹き七轉八倒
 水火塗炭の苦楚を嘗むるを袖手傍觀して天堂に贅澤榮華を極め餓死
 は馬鹿劣敗者の常耳敢て怪むに足らずと冷笑して却て己れの優勝に
 誇る者の如き彼等なれば文州社會も餘り必用なき道德以上の屁理窟
 お困ればを施して怨に報ゆるに恩を以てするの愚を學ぶ可らず若し
 果して然は文明開化てふ者は氣に喰ひす蟲も亦好かす已に厭倦し了
 せり故お文明開化の民とありて空腹を抱へ穴側よ彷徨して空く死を
 俟たんより寧ろ野蠻夷狄の民となるも桴に乗て支那海よ浮び周公殿
 に從て麒麟鳳凰と遊ぶの愈れるも若かざるなり世間の馬鹿組貧乏連
 は果して如何なる御思召あるは斯く吼へ去り吼へ來るも胸お手を當

て首を傾け考熟考すれば文明開化てふ者の馬鹿退治貧乏殺の如き殺
 代臭き不意氣の者よの非ざる可し然とも聞くが如くんば文明ある者
 は優美閑雅の風撲直仁愛の俗を殺き去て人心を殺伐臭き境遇は陥れ
 却て人間の安樂を攪だすの恐ある者ありと是れ蓋し文明の潮に乗じ
 開化の波を凌ぐを得ざる劣敗者貧乏野郎の徒に世を憤る者の不平を
 洩せし囁語も過ぎざる可し議史の文明開化てふ者の斯る殺伐臭き不
 意氣の者に非ざるを信するなり然ば則ち彼の懸絲傀儡の拿破倫鍍金
 細工の龍宮城多の文明歎放屁隊長の空鐵砲蕩樂將軍の亂痴奇騒動多
 の文明歎猫騷動の醜態權的狂の臭聞多きは文明歎然らざれば英佛獨
 漢等の謎々の糟粕を嘗め來て西洋を鼻は掛け以て法螺を吹き大言を
 叩く者多きは文明歎頭に馬糞を載き身に歐米の衣裳を聚め男子と手
 を携へて揚々横行する鴛女多きは文明歎將た自由の假聲を吼へ民權

の真似着を囁り壓制を訴へ不平を鳴らす者多きは開化なる歎シヤン
 パン、ピフチキ(飲食)ダンス(舞踏)パン、ポトル(假裝會)の流行は開化
 ある歎議史の見る所を以てすれば文明開化なる者は斯る浮薄的の氣質
 を帯ふる面白からざる者よ非ざるを信するなり蓋し前言は即ち文明
 の骨肉にして後言は即ち文明の皮膚なり故に前後相俟て始て全体の
 文明開化を成す者歎若し亦然らすとせば日本の文明開化の今何れも
 潜伏するや何そ速に其顔面を出して議史の疑團を氷解せざるや抑文
 明開化其の物の日本人と交際するを欲せざる歎將た電氣に乗て已に
 西洋に歸り去りしや否否邦國の異なるに因て其の事物の亦異なるあ
 るの蓋し自然の理勢にして現に西洋人の不潔も日本に舶來すれば日
 本人は之を味噌と尊崇し西洋の糟粕も日本に輸入すれば日本人の舌
 打鳴して其甘味に酔ひ舌な東西鬚髯の赤黒眼色の茶緑の相異なるが

如し其風土の異なるに隨て亦自ら其事物に差を生じて東洋の文明は西洋の文明と異なり西洋の開化は東洋の開化と同じからざるや必せり故に我日本帝國の文明開化の以上二者の外に在らざる歟嗚呼日本の文明開化は一種特別に是れ東西万里風土の異なるに因る歟若し又然りとせば議史の後れて馬鹿退治貧乏殺の爲めに窘められんより寧ろ先じて馬鹿の大元師貧乏の大隊將となりて生兵法なまひやうほうを九尺二間の貧乏小屋に運らし以て不意氣にして面白からざる者を打斃し施て天下の腰拔漢こしひかかん我利蒙者わりのうしやを濟度し以て我帝國をして華胥の國たらしめんと欲する耳先づ書して以て文明開化の主義を文明開化の大先生に質し將は出陣の途に登らんと欲するなり固り素寒貧兼陳腐野郎の生兵法敗を取るの覺悟の前あるも此野郎元來勇進敢爲の氣質と大なる膽玉とあり故は荷も指も反して縮くんば千万人と雖も備れず筆鋒の手當

次第上下左右縦横前後より斬り回り斃れて而後に止む而已識らす生兵法の大傷の本歟

官 吏

御尤千萬あり、恐縮の至あり、最も妙案、至て名策、甚た感服尤も可なり、頗る妙あり、然矣、然矣、左様々々、貴命の如く、尊慮の通と、朝に權門に至りて、惟々を唱へ、夕は勢家に入りて、諾々を稱し、聲なきに聽き形なきに視命を俟たずして、能く走り骨を惜まずして、能く働き意を受けて、以て百事を周旋し、命に従ふて、以て萬端を幹理し、肩を脅かして、器具の美を唱し、手を摩して、扇頼の妙を説き、顔を裝ふて、庭砌の風雅を談じ、笑を含で、鬚の赤色を稱し、舌を鳴らして、下物の佳味を感じ、鼻を揺めかして、放屁の馨香を稱し、首を傾けて、痘痕は古致を賞し、兒童の惡戯を認めて、其活儼を稱し、女子の軟弱を視て、其柔和を稱し、敢て圍碁の敗を取て、其當り

難きに驚き勉めて骨牌の勝を譲て其妙手に感じ洋琴の不節を聴て鐘
 乎鞠の死を悲み歌聲の澁濁を聴て師曠地下お嘯し詩を拜讀して枕山
 非評を受け書を熟視して三洲讒謗を被り功言命色詐偽八百常に其御
 機嫌を損し逆髻は觸れんことを是れ懼れ尊姐に權夫人お若殿に阿孃
 に與々として腰を屈し屈々として首を轉ばすを以て事務章程を爲す
 者は果して胡爲者を蓋し亦四支五体を具へ加るに二個の翠丸を所持
 する人間なり蓋し此者や唯長次官あるを知りて恥を知らず獨り局課
 長あるを知りて義を知らず已に恥を知らず又義を知らず唯其愚を憐
 む耳填然鼓を鳴して誅むるの勢を取らず惟嘗て片言以て左右呈す
 る而已曰貴官の所爲良心及二個の翠丸は恥るなき歟と彼將た答へて
 曰はん果して汝の言の如く乃公の己お恥を知らず否か之を知れば愚
 きを如何豈よ良心及翠丸は問ふお違わらんやと議史曰然矣然矣

左様々々貴命の如く尊慮の通と復た何をか嘯らん何則ち以上説く所
 昔の事よして現今の官海よ斯る醜態おければ敢て諸々の忠言を奉る
 必用なければあり唯書して以て官吏其御方の足下に呈し其殷鑑は供
 せんと欲する老婆心
 儀狄の酒の舟を運らし易牙の味は山を爲し南威の美の長圍を築き寶
 鼎を視る鍋釜の如く美玉を視る石礫の如く金銀を視る土塊の如く紙
 幣を視る紙屑の如く梅檀を視る屁れ如し況や齷齪の奴隸は於ける人
 民の蛆蟲お於ける味憎れ不潔は於ける團子の馬糞お於けるか如くなる
 の怪むお足らざるをや或は鬆車を馳て紅樓朱陌に小艾の新爪を味ひ
 或は肥馬を驅て花柳の枝に繋ぎ或は權的の手を夜會に携へ或は夫人
 と車を演劇に同ふし或は月を田毎に賞し或は花を吉野に觀或は遠く
 龍敦に保養を爲し巴理に遊歩を試み浜に浴し舞雩お風して詠じて歸
 り時としては敖遊の勞を官房の椅子に慰め惟々の音諾々れ聲に行旅

の疲を醫し贅澤に榮華に愉快に面白く安々焉閑々乎樂々然と光陰と消するの餘公其の人常は能なる歟嗚呼可羨哉議史試に公等も問はれ公等又嘗は鱷輩も問へ乃公の前世の主も於て誰に比す可しと蓋し異口同音必ず對へて曰はれ周の文武も比す可しと此時に當て公等は然矣を々と云ふ歟將た乃公乃ち今文武に若かさるを知るなり文武の臣豈に面諛汝が若き者あらんやと云ふ歟蓋し公等の答ふる所は後言も在らずして前言に在るを知るなり何則ち公等の元來功言令色を好むが故に其好も應して之を献する者あるに過ぎざるなり若し公等もして元就の言の如くならしめば惟々の聲諂諛の風の忽ち去て其痕跡だも止めざるを信すればなり因是觀之れば餘公は陽も鱷輩を玩弄するも似たるも陰に却て鱷輩を弄する者とならざるなき歟噫測らざりき官海に諂諛の弊風を吹かしめしめし彼も在らずして却て此も在らんと

の抑惟々諸々の音は心に快きも自由民權の聲は聞ふ煩はしき歟左様御尤の音の耳に適するも貧に泣き窮ふ號ぶの聲は嘗て耳朶に達せざる歟又鱷輩の吾公遊ばずんば吾何を以て休めん吾公豫たのしますんば吾何を以て助からんと稱賛し奉りて例の御好も投するも吾人人民は一遊一豫の人民も眞に人民も憂慮措く能はず唯空腹を抱へて其窮を哀訴する而已嗚呼今の鱷公は己に惟々諸々の音も左様御尤の聲も興論公議の勢力なき亦以へなきに非ざる歟と個は是れ意を官も得ざる不平者流の惡口に過ぎざるも蓋し今の官吏の概して贅澤なり驕奢なり金離れの好き官吏あり貧乏の何物ざるを知らざる官吏なり伏して望むらくは今の官吏をして貧乏たらしめ以て其苦を知らしめんを而して地方の官吏は之を都會の官吏も比すれば尙ほ幕府地代の役人風を存して萬事萬端儼然として高尙に構まへ奉り其權柄肩以て風を切

り大民を蛆蟲視して傍に人なきが如し常に横柄よして傲慢なる風情ありて人をして一瞥敬を起し一近恐を生じ深淵は臨むが如く薄氷を踏むが如く戦々又兢々三伏の候も尙ほ皮膚粟を生じ心膽をして凝結せしむるの感なき能はず況や嚴寒の候に於てをや嗚呼寒矣々々可畏

士族

諺云く花と是れ櫻花人の是れ武士と蓋し花多しと雖も櫻花より艶なるはなく人衆しと雖も武士より榮なる莫きの謂なり然るも今や士族の死族と化し貴族の寒族と變じ又櫻花の西洋熱も浮かさるゝ奴隸多きが爲に其艶を薔薇花と譲りて己に不通の諺とはなりぬ回顧すれば往昔幕府封建の代ふ在ての果して此諺ふ違はず武門と唱へ武士と稱して頭に糞船の東蕪を戴き腰ふ人斬庖刀を挟み都々逸子の所謂る長

刀を帯ぶる榮華の御めは非ず人を斬り人を殺すが爲めありと人民を赤子南爪視む苟も敬を失ふ者あれば斬り之を殺す赤子の如く南爪の如く恬然として意も介せざる者に似たり常に揚々横行して糞力味も威張り散らせしも今や變じて一放屁の價直だもなく米櫃の底を叩て時々苦しと唱へ財囊を倒にして噫々悲しと號び腕車は梶を握て御免才を叫び常に窮途に彷徨む貧界に沈淪して動すれり則はち臆を繋るすの厄を免る能はず(薩長土肥の士族は此限り非ず)苟も死を致す屁を放つが如く常も溝壑に在るを忘れず其元を失ふを恐れず日本帝國の名産郎ち大和魂あるあらば常も赤耻を晒して祖先鎗尖の武勳を汚さんより寧ろ祖先の影前に腹を左右縦横も屠り十二支腸と握て貧乏神の醜面に抛擲し以て極樂淨土に遊歩するの快を取るも孰與れぞや然るを若し屠腹する能はずんば則ち徒に壯士と唱へて亂暴

を爲し浪人と稱して無法を働くより須く實業に従ふ可し蓋し君等は
 往昔鎗、採劔の術は従事し腕力に富まざるに非されり鎗は換ふるに未
 耜を以てし劔に代ふるに鋤鎌を以てし糞を擔き芋を掘るの愈れるは
 一若かさるを信するなり請ふ君等自ら士族と稱して三民の上は位する
 者と思ふ勿れ何則ち往昔は苟も士族の名あれば則ち之に添ふるに多
 少の秩祿を以てし中古は其名ありて之に添ふるに秩祿の扶助なきも
 平民に比すれば惡事を爲して一割の徳即ち減刑の法あるも今日に至り
 ては秩祿なく減刑なく田畑なく貨幣なく米麥なく家屋なく活智なく
 何もなく彼もなく無々泣々耳にして有る者の徒士族の名のみにして
 其實なきに非ずや故に竊盜を業とするも追劔を事とするも得策に非
 ず蓋し獄屋住居は衣食住は安心なるも元來懶惰に慣れたる身必らず
 其役に堪へず異日臍を噛むの後悔あれば竊盜業も斷念し矢張り糞を

擔き芋を掘るの業に従ふこそ得策なるぞかし斯く云ふ議史も亦士族
 隨分腕は覺あり往時威武を四方は張り天下を睥睨せし小林甲斐守と
 り即ち我輩あり今や秩祿の手切金即ち奉還金は己に別嬪の下口と自
 己の上口とお投じ去て精液と化し糞と變じて徒に臭態を流す耳己に
 一放屁は價直なき御人物といかりぬ常に貧乏神の壓制に堪へず苦し
 マキレは惡口雜言以て其口錢否同族相愛し同貧相憐むの情を以て忠
 告善導の勞を取る而已不惡思召可被下候齋戒沐浴頓首々々謹言芽出
 度可祝此段相達候事

農民

馬糞を拾ふて畑を肥やし大小便を垂れて田に灌ぐを知るも他に幾多
 の肥料あるを知らず獨り鋤鎌耒耜あるを知りて他に勞力を省くは器
 械あるを知らず從來の習慣と柱曆の下段とに依て土を堀り糞を灌ぐ

を知らず「いろはにはへ」と知らず況や農學をや吉凶方角を視て種を
 蒔き加持祈禱に豊年を望むを知るも勢よ乘るを知らず南無阿彌陀佛
 を吼へて毘塞滿善汗邪滿車を祝し蠶影山を拜百拜して蠶兒安全良繭
 滿藏を祈り虱を捫て當世の務を論じて曰百姓の糞力を養へば可なり
 豈よ四角の文字及蚘形字を知るを要せんやと自ら其無智よ安じ足數
 里以内を出てす眼田野の外を視ず江戸あるを知りて東京を知らず五
 節句あるを知りて祭日嘉節あるを知らず他國の人の皆唐人よして唐
 洋の服あるを知らず病を醫するに獨り神佛符水及越中富山の賣樂ある
 を知りて洋水藥を危險の者とし顧みず迅雷には蚊帳と桑原々々の祝
 辭よ以て避雷柱に換へ早魃よの太鼓と擲て雨を呼ひ彗星日蝕には必
 ず變じ川の神よ團子を供へ佛の神よ線香を焼て無事を祈り西郷様は
 未だ死せざして外國よ在り早晚公方様と共に出て、不景氣を挽回す

るの勞を取るを樂み知事郡長の來往よ長老道路を清め男女群りて拜
 顔を争ひ議員チウ投票おは村長に同意し村内の喧嘩口論おは旦那寺
 の御聖よ裁判を依頼し金錢の貸借は印判を債主よ渡し明日を約して
 歸る平氣や樂れ人間多きい憐ひべきも亦餘ありと云ふ可し之よ反し
 て少く文字を知れば忽ち鯨公の養澤榮華を羨て自己の土臭と糞臭と
 を嫌ひ本業を忘却し去て鼻下文明を表し身よ開化を裝ふて惟々諸々
 を嘲へづり以て他の髯塵を拂いんと欲するよ非すんば則ち徒に自由
 民權を嘲り法螺を叩き囂語を吼ゆる生意野郎からさるあし夫れ此の
 如く田舎の殆ど充すに無智文盲の糞野郎と無法懶惰の生意氣漢とを
 以てす是を以て田舎の方よ貧一等を加へて日夜糞土に塗れ糞力を振
 ふて地を掘るも常に租税だも掘出す能はず勞動よ貧乏追附すとの諺
 に違ふて貧乏神の方よ亞刺北亞の駿馬に鞭て窮民に先じ常に精練た

も飽く能はず況や麥飯お於てとや至る處^び々^び貧を鳴らし^う々^う窮を訴へ宛然餓鬼を以て道路に充たす如き慘狀を現するに至る蓋し此時に當て地方の繁昌を極むる者は獨り裁判所と監獄署と耳囁々果して恒産無ければ因て恒心なし苟も恒心なければ放肆邪侈爲さるなき耳罪も陥るに及て然後從て之を刑す固り當然耳議史は決して民を罔する謂どはさるあり唯其愚を憐む耳馬鹿の多きお驚く耳抑百姓其人は果して何爲る者ぞ蓋し常は榮華を盡し贅澤を極めて貧乏の俸は何物たるを知らざる餘公其人を養ふ租税製造人なり租税製造人は能く餘公をして極樂淨土お安閑たらしむるもこれお却て八大地獄に陥りて水火塗炭七轉八倒の苦を爲す是を不權衡不釣合と曰ひすして何ろや而して斯る不權衡不釣合を來たせし所以の者は一二おして足らずと雖も農民其の人の時勢お後るゝの致す所と謂ひさる可らと夫れ明治社

會の事々物々改進黨歩を加へて頻に文明の上塗^{うま}を爲し開化の色擧^{いろあがり}を爲すも拘りらず農民は依然自製の大小便と固有れ糞力とに依て土を堀り食ふて^た糞^たし發^たして^た食^たふ一の製糞器械たるに過ぎざる者多きに非ずや之を他の事物に比するに其進歩は遲速猶ほ牛お乘て遅々善光寺お之しと瀛車お帆を擧て駸々横濱お馳するが如きなり又今の農民の未だ幕府の亂暴無法の政治の下お在りし習慣を脱する能はずして自ら爲以く其地位の輕き屁の如く其身の賤き糞の如く徒ら糞力を糞ふて糞土お塗れ大小便を自製して田畑に灌がば可なり豈も四角の文字を知るを要せんやと是れ自ら悔る者おして其自ら悔るの心の社會の進歩に後れて現今の窮狀を造出せし一近因にあらすして何ぞや毛唐氏曰夫れ人自ら悔て而後人之を悔り家必ず自ら毀て而後に人之を毀つと其言の甘き甘露の砂糖漬も嘗ならざるあり農民其人も

亦く喫以て其甘味を賞せざる可らず胡葡萄^{にんじ}午^ご等^{とう}の比にあらざるるか
 も汝窮民汝が祖先傳來の田畑家屋は今何處に在る汝の家を毀ちし
 汝自ら毀ちしなるぞ決して他人に非ざるなり齊東野人曰^い自負^{よこぼれ}と傲氣^{あうけ}
 なき者は非らずと齷齪も賢明を鼻下に掛て紳士に擬し阿^あ糞^{ふん}も麥^{むぎ}粉^{こな}
 を偽糞と塗附して少町を氣取り自負其人の瀧の真砂より尙ほ多しと
 雖も貴重^{たか}の地位に在て却て自ら蠟^{ろう}蟲^{むし}に比する汝農民其人の量見こそ
 解^とる能^よ味^{あじ}みるなり汝知らずや民を重しとし社稷之を繼ぐの古言を
 汝無^なすや汝は給公の親分たるを果して然り汝の地位に重き阿^あ糞^{ふん}及^{およ}食^じ
 糞^{ふん}の穢^けも嘗^{かつ}ならずさるなり汝又知らずや常に野に在て糞を擔ぐも志を
 得^えて朝に立て天下の權を握り得る至極面白き社會なるを斯く其地
 位の重き御百姓様なれば窮境に安じ貧乏神と戰^{たたか}死^にせんより寧ろ蛆蟲^{かみ}
 と邂逅して方に馬鹿に鞭^{むち}ち時勢を追はざる可らず之を製するの議史

は農民其人は望む惟自ら侮らば其地位の重く其身の貴きことを糞桶
 に踏^ふしして忘却せざらんことを果して然り早晚^{あす}酸^{すい}も辛^{から}も知る可く芋
 の成熟^{じやうじゆう}も御存じある可く又進て學問の必要も知る可く治國平天下の
 道も知る可く况や屁の臭に於てをや是れ決して屁理窟糞議論も非さ
 るぞかし請ふ日お糞桶の銘を三省して方に糞發せられんことを

商人

首を轉ばしと能く世事を嘲するの商法の秘訣歎腰を屈して他の機嫌
 を取るの商賣の奥義歎虚言八百功言八千以て他を欺くは賣買の原則
 なる歎商業社會至る所此弊風あるの豈に癩癩玉に觸れざんと欲るも
 得んや議士嘗て之を商學博士に聽く曰往昔の商人の馬鹿と狂人とを
 以て對手と爲し萬事の都合猶や牡丹餅を以て頰面を叩かるゝが如きな
 り馬鹿百姓は糞汗を垂れ牡丹餅を製して狂人士族に贈り狂人士族の

直ふ之を以て商人類面を叩き商人は惟口を開くの勢を取る耳蓋し往昔の百姓を民草と稱し士族の之を人間視せず米を生ずる草と認むる耳若し米を生せざれば引拔も可あり刈取るも亦可なり百姓の命は士族の爲めあり無盡の田園ありと今の商人も尙ほ亦壯丹餅を以て其類面を叩く者あるを俟つ歟今の世に當て誰れか壯丹餅を以て他の類面を叩く馬鹿と狂人とあらんや蓋し今の商人は概して彼土百姓と一般維新前の殘物耳時候後れの古物耳豈ふ其法を學術に講じ其理を經驗に照す者あらんや是れ果して古物保存主義歟馬鹿の社會にの亦馬鹿氣太主義もある者哉此殘物や此古物や往昔の如く其對手の皆馬鹿狂人と爲す歟汝が殘物こそ眞ふ馬鹿なれ汝古物こそ誠に狂人なれ己も馬鹿狂人にして却て他を馬鹿狂人視す嗚呼憐む可きの馬鹿あり畏る可きの狂人なり抑今の商人は概して詐偽を新聞に廣告し見本を物品

に倚り頭を低ふして價を高ふし能く世事を嘲りて褒美頂戴を唱へ店頭不二價の扁額を掲げて人れ賢愚を察して其價を上下し物品に正札を附して客の都鄙を視て其直を左右するを以て常とす故に客亦招牌の現金懸直なきを認識するも一圓の物品の半圓に減じ客高直を唱ふれば菅店機能を説き動すれば則ち議論數時を涉り終に堪忍力の強き者が勝を制するに至る是を以て犢鼻褌一筋を買ふも客地合粗にして且薄く罽丸の洩るゝ恐あるのみならず勃然として起さば破截するの憂あり甚た不廉あり宜く半額を減す可しと云へば菅店地合粗なれば空氣の流通宜く男根常に活潑にして病痾を生ずるの憂あり且風の縊死すると放屁發散の神速なる益あり故に決して不廉ならざるを主張し其問答二三時に涉り議論半日を経過し餘は則ち以下次號となり否遂に決を視る能はずして相別れ數日の會議を経て始めて拍手し其決

を羨する等常に悠々光陰の流車に乗て西馳するを知らず商法に最も重宝可き時の金なり遷延の時の賊たる金言を服膺する者の如き蓋し猶ほ娼妓の眞實鷄子の方形まがたに於けるが如きなり馬鹿ばか狂人きやうじん店頭大福帳を掲ぐる古物ふるもの恵比壽を祭りて商運を祈り大黒を飾りて福祿を祝する殘物ざんぶつ固り怪む足らざるあり嗚呼其衰へたる壽久し蓋し未だ夢は五港を視ざる者況や龍敦をや是れ中等以下は商人の状況なるが中等以上即ち紳商と稱する者も唯其大小の差ある耳亦尚く平身低頭主義諂商略を取る猶蠶輩の餘公に於けるが如く巧言令色を賣とし〇〇〇を餌とし以て巧に大魚を釣り御用商人となりて濡手の粟に於ける牡丹餅の頬面に於けるが如く勞せず財富を盤断して飽くを知らず貨幣を積て山を築く有益の大事業を起すを知らず其舉丸と膽玉の少き解蚌の卵の如く徒ら守銭奴金番人に過ぎざるなり實は金錢の奴隷經濟社會の油蟲耳只金錢あるを知りて禮義廉恥を知らざる痴漢耳此痴漢守銭奴をして經濟世界に第二の貴族政治を造らしむ嗚呼彼奸商と此〇〇〇と相待て此結果……終に良民を害し社會を毒するの恐れなき能はず故に今よして覺悟する所なくんば早晩海外法權と内地雜居と貿易し外人の内地に雜居するの曉に至れば彼外人の牡丹餅を以て我商人の頬面を叩く歎將た鷹毛とびげまで拔去る歎又我古物的の口を開て牡丹餅の舶來するを俟つ歎議史の今より堅く特鼻權を結で御唇の用心せられんとを望むなり蓋し彼外商は方に大筆大綱を製し我が内地の門扉開くるを俟て闖入し頻に餌を投して一擧に馬鹿を釣り狂人を罔し其利を一攫し去らんと手に唾して俟つや百萬倍の顯微鏡を以て大火事を視るよりも明なり今にして之を見るなくば彼外商は我商業社會を蹂躪して其利を蚕食し終に我商人

は外商に手代となり管店となり其商店は外商の支店とあり其貨幣は外國に出寄留となり移住となり徒ら貧乏神の横行するを視るの不幸を現するも亦知る可らず此時に當て惠比壽を祈るも大黒を祝するも惠比壽大黒も亦衆寡敵せず貧乏神の壓制する所となりて亦外國に放逐せらるゝや得て知る可きなり果して然らば汝古物は唯貧乏神と戦死して止まん耳何となれば則ち彼我商業社會に人品を評せば彼商人の信用を貴ひ名譽を重する學問經驗の兼備せる君子なるも我商人の全く之に反し信用名譽を重せざる耳ならず概ね一時の小利に迷ふて詐偽百出明日の一圓よりの寧ろ今日の半圓を得んと欲し永遠の利害を顧みざる經驗薄き商業學に通せざる不具不義の小人なれば互に相對峙して商戦を爲すも必ず勝を制するの理窟なければあり己お我商業社會の衰頹此の如し念にして之が不具不義は商人の長眠を攪破し去

らずんば日本帝國は貧乏神の彌々跋扈横行して終に恐くは制止する能はざるに至る可し誠お思へ我日本の國たる蟬蛸の畢丸的の如き細少なる者なれば農業如何に進歩改良せり逆限りある地より限なきの富を生ずる能はざるも獨り商業に在ては然らず其國細少あるも其地瘠土なるも獨り商業社會にして其道に明に其法に達し活潑敏捷機に投じ變お應ずるの術を逞ふするに至れば彼英國の如く其國少なりと雖も終お其版圖を擴張し其富權を増殖し宇内を雄視するに至るの理勢の然らしむる所なればあり故に今後我帝國をして富強たらしむるも貧弱たらしむるも唯商業の盛衰如何に在りてと謂ふも決して無法の言に非らざるを信するあり然るも拘はらず我古物的商人と唯口を開て牡丹餅の到來を俟つ今や遲しと悠々緩々殆ど日晷の長さよ苦み煙草吹盡して欠伸之を繼ぎ終る船を店頭に漕ぎ華胥の國に遊びて

前後を知らざる者多きは何たる事を嘆き如何すべき愚かな愚かな汝を如何せん

僧侶

清室の善男善女諸君よ常々懈怠なく聽聞の勞を取り現も今日の如き
殆ど立錫の地を餘さず愚僧に於ても満足に至り畢竟するに諸君が佛
の難有きを知るの致す所彌々信之益を敬し現世未來に福祿果報を求
む可し然るも社會往々不良見不心得の者多く難有き佛法よ遇ふて三
寶に歸依せず煩悩の火に逐はれて身を貧乏の火に焦がし一時の利慾
を貪り未來の大事を忘却し下し後世六道の迷ひ彷徨して極樂淨土に
往生し能はざる者殆ど其數を知る可らず嗚呼憐む可き哉反之して諸
君の常に念佛修行を事として迷の雲を拂ひ曩日本堂建立に拘る出費
の如き過分の金を喜捨し且先を争ふて子來し日ならずして其功を奏
し己よ諸君と此堂に相會して共に佛事を修むるに至る其喜も亦餘ぬ

り云ふ可し而して元來喜捨と申すも全く捨るに非ず又失ふに非ず
して因果應報の道理の外ならず即ち未來永劫安樂往生の資本耳善根
を植へ善種を蒔くは過ぎざるなり故に諸君の現世未來も非常の幸福
を得るは愚僧の堅く保証する所固り疑ふ可き限り非ざるなりと個
人は是れ腥臭坊ニホクサヤクが慾張主義欺騙術を講じて無智の愚民を陥れ其喜捨金
の過半は肉食妻帶末法破戒の共養料を消費する耳現今の腥臭坊は佛
を信するに非ず法を喜ぶ非ず釋伽を己れの餌食と供して愚民の膏
血を吸ひ日蓮を前驅だしにつかへして亡者の財囊を絞るも外ならざるなり畢竟す
るに釋伽の己れの米櫃耳日蓮の其財囊耳若し釋伽日蓮よして己れの
米櫃財囊を肥して愚民を欺くの餌食と成らすんば則ち誰か合掌して
尊崇する者あらんと口に明言せざる獨り首肯うなづくする圓顛げんてんもあらざるは
亦し眞に釋伽の大罪人愚民の油蟲耳其職とする所の唯死人の極樂行

道中記を教示して其案内料を貪るゝ過ぎさるかり蓋し釋伽牟尼佛も地下に切齒して瞑目し得ざる可し地蔵藥師も其意外あるに膽を潰せしからん撃々太鼓を打て南無阿彌陀佛を唱へ鏗々鐘を鳴らして法蓮華經を稱するも惟已れの懷を肥す文句の冒頭耳馬鹿を誘ふ手術耳決して佛を敬するの心底お出るに非ざるなり喃々善男善女に説き喋々破邪や退治と青筋張て噪き回るも自家撞着片腹痛しと云ふ外なきあり獨り憐む之が信徒たる者の徒に妙法蓮華經を吼へて寐て佛運れ來るを俟ち百萬遍を轉りて直に極樂往生を期し家内安全無事息災は佛を祈るお在り子孫長久の佛に施すに在り病痾の全快は佛に依らすんば能はず富貴利達は佛の願助を受くるゝ非すんば能はず除盜難の固り佛除火災も亦固り佛彼も佛此も亦佛と佛々々々南無々々々々と唱へて常に腥臭坊の餌食となり祈殺す所となる者多を憐むなり其弊の

極終は病人を殺すに至る噫々其懼る可し惡む可き何物か此右に出する者あらん矢人は惟人を傷ふらさらんを恐る巫匠も亦然り故に術慎まざる可らずの古語今日僧侶の所爲を聞見し始て毛唐氏の法螺を叩かざるを知れり抑此腥臭坊や常に已れの職掌は法會の牡丹餅と共お棚上に置きて生意氣お行過おも其歩を横町と馳せて國會とか撰被撰權とか無用の御宗旨違の御經を轉り建白とか請願とか唱へり噪回るは是亦片腹痛しと云ふ外なきあり汝等腥臭坊等には權利義務の暫く無用なり汝等無用の心配無用の奔走を爲して老婆臍栗老爺の涙錢を費消せんより速お本性に回復し日本の柱石と爲り導師となりて同胞兄弟を濟度す可き職掌を盡すの心得なき欺矢張り阿房惰懶經を蕩樂寺よ唱へ徒に凡愚々々の木魚を叩て擅家の膏を絞らんと要し釋迦を泥坊おし佛法を滅法にし唯活大黒を濟度して之れと涅盤を偕にする

を以て僧侶の本職と爲す歟南無御布施大菩薩南無香雲大如來と唱へて二六時中耳を鴉聲からすなきに傾けて凶計の至るを俟つ耳他も職とする所なき歟汝等の眞の佛法怨敵獅身の蟲日本帝國の大賊なり衆議院の汝等大賊を容る場所非ざるぞかし諺曰惡僧侶及袈裟ほうせだくろいやくさと果して然り坊主臭き者抹香臭き者は眞に惡むべし々々々々々々噫々々

醫者

我國事物の進歩中殊に其著しき者の醫業として其術殆ど極度に達し四百四病は盡く驅て他の野蠻國も放逐し敢て其毒を逞ふするを得ざらしむ嗚呼亦快なる哉假令へ僅も其隙に乗じて發することあるも忽ち驅り隨て發すれば則ち隨て驅り病魔をして殆ど其住居なきに苦ましむる者の如く人をして殆ど其性命の長きも倦で頻も欠伸を起さしむるに至る議史會で和總兵衛君も不死の國の狀況を聽て思はず可羨

の語を發せしめしも今や現も不老不死の國に遊ぶの榮を得る者の如し抑議史の元來死を好まず天皇地皇氏の兄弟たらんことを欲する者なり然るに今や我國醫業の發達此の如し何たる福祉乎試に思へ五錢の寶丹の能く起死回生の效あり六錢の精錡水の盲者をして復ひ天地日月の光を視せしむるの驗あるに非ずや畢竟するに生命の相場下落して一人は生命は茄子南瓜と一般僅も五六錢の價直ある耳嗚呼亦廉なる哉世間下等は人物を稱して南瓜野郎と云ふ議史未だ嘗て其何故たるを知らず今日に至て始て其南瓜野郎たるを知る南瓜論の筆鋒横殺し寶丹精錡水の效驗已に然り況や名醫の手術不老不死行の誤りの誤り謹て抹するの難からざるに於をや已も不老不死の妙藥あり彼れ虎烈刺的何爲る者を敢て懼るゝに足らず況や痛頭鉢巻も於てをや秦皇をして今代も生れしめば必ず満足するを得せしむ可し嗚呼果して醫の仁術なる

哉失れ然矣然りと雖も議史をして常々醫の不仁術あると嘆せしめず
 元ば非ざるなり何とか之を云ふ夫れ地方往々藪澤筍庵先生ありて金
 錢を取て人を殺すを業とし其人を殺すや蚤虱を捫るの快を取るより
 尙ほ快き者の如く然り是れ他あし自生の蚤虱を捫るの惟僅に身軀は
 癢を去るの快を覺る耳之が爲め報るに金錢を以てする者なきも人
 を殺せば則ち却て金錢の報酬あればなり噫藪澤先生の恐る可き豺狼
 も畜さらざるなり否な藪醫も均く是れ四肢五体を具ふる人間は相違
 なければ假令へ金錢を得るも人を殺すは心は快からざるに相違なし
 と雖も不智不識人を殺すの多く且久ふして其習慣已ふ第二の天性と
 ありて其不智を感せざるも因る歎人死すれば則ち曰吾に非ざるなり
 匙なりと云ふ否な命なりと云ひ猶ほ月世界人の死するが如く恬とし
 て敢て意を介せず唯尋て病氣の流行せざるを憂ふるに過ぎざるなり

畢竟するに彼れ藪澤先生なる者の蓋し病を醫するの稀にして病を長
 ずること多し人を活すこと少ふして殺すこと多しと云ふも過ぎざる
 なり何となれば則ち此藪醫や祖先より其業を續く明治の初年試験を
 要せずして人殺の招牌かんばんではない醫業免許の招牌かんばんを得るも診断書や死
 体驗案書も満足も記するを得ず又傷寒論も全く讀了する能はざる者
 あるは議史の往々聞見する所として蔽ふ可らざるの事實あり況や逸
 業り醫者も於てをや已む醫者もして醫書を讀む能はず豈も其術を知る
 の理窟あらんや醫術を知らずして病を治む人を殺さしらんと欲する
 も豈に得可けんや然とも此藪醫や能くも古諺を守りて其玄關の美を
 るの固り言を待たず多少の空壘を購ひ來て充たすに青黃赤白黒の水
 を以てし大小長短序を整へて相隣次し草根と木皮と各位置を占めて
 相並列し漢と洋と相接し七箸とロップと相雜はり人をして一瞥以て

漢洋兼備の國手たるを知らじめ又其口の利口にして能く囁へずり
 眞赤の法螺なりと雖も漢洋の醫法を談じて其效驗長短を辨じ陰お已
 れの技能に誇りて其繁昌を示し陽お同業者の失を擧て飲種めしたねを蔭くに
 怠らざるなり畢竟するお其糊口の資本は醫術に在らずして獨り口實に
 在る耳其危険も亦極れりと云ふ可し獨り怪む此醫者にして能く其業
 に食て未だ餓死せざるを是れ他あし生命お豫備かひがなきを知らずして大
 切おせざる不知命いのちしなの阿房漢多きや必せり否な誰か生を惡み死を欲す
 る者あらん蓋し其生を欲するが故に酒肴を饗し茶菓を供へ先生々々
 を唱へて能く之を尊崇し以て生を求めんと欲する耳先生も亦其機小
 乘おし乃公お在焉お亦何を患ふるお足らんと馬鹿と無法と相待て馬鹿者金
 錢を擲て死地虎自ら安じ無法者不識不知其病勢を長せしめ終ふ之を
 殺すの過に坐する耳噫々其愚や眞お憐む可く彼の無法や實に惡む可

なり假令へ此の如き醫者の小數なりとするも地方概ね藪醫ならざる
 かきは議史をして敢て其不仁術たるを訴へしむる所以なり否か醫は
 仁術あり此等藪醫連の假令へ餘術の免許を得るも決して醫者よ非さ
 るなり何とされい則ち天下廣しと雖も宇宙大なりと雖も人を殺すを
 業とする醫者あらざればなり已よ所謂人命の價値の僅お五六錢に
 過ぎざるも茄子南瓜を斬るか如く容易に殺さるゝに忍びんや斯く論
 ぶ去るも其實決して人を殺すの醫者ありざるべし然も唯藪醫の往々
 輕忽に病者を待つ者あるを惡むの餘之を戒めんとするは心切なるよ
 の不識不知其論鋒の終に之に至りしお過ぎざるなり畢竟するも議史
 は唯明治の初年試檢を要せずして開業せし醫者の更に試檢し以て人
 殺強盜否な藪澤筍庵連を絶ち以て愚民無辜の死を救濟せられんこ
 とを敢て官術に望む其爲め口上此の如く爾り

教員

教員に大小高下の別ありと雖も其任阿鼻の譬より重く其責權助の腹より尙ほ大にして九鼎大呂も嘗あらざる責任の重きハ蓋し小學教員の右も出する者なかる可し故に議史ハ先づ専ら其任の重且大なる小學教員ハ嘴付かんと欲するあり否ハ論鋒を傾けんと欲するなり夫れ是レ阿房に在るも憐悞おするも生意氣おするも聖賢君子おするも皆獲其人の方寸に在り其國をして文明開化たらしむるも野蠻夷狄たらしむるも亦其鞭の振回し加減如何ハ在る耳嗚呼果して其任や重且大其枝や廣且深おして鬼神も面衣を脱して其門は降服せざるを得ず語を換へて之を約言すれば則ち教員ハ聖賢君子英雄豪傑の製造人なりと云ふも過りざるなり然も其鞭の振り加減如何ハ因りては生意氣野郎亂暴人阿房漢の誤製造を生ずるも有り勝なれども個ハ其父兄の

注問ハ非ざるなり又教員其人の目的ハ非ざるなり已に其注問ハあらず又其目的ハ非ざるも往々誤製造を爲すの恐あり故に苟も教員たる者は其校に在るや魯翁の郷黨も於けるが如く恠を踏々蹴々敬々肅々戰々競々進退規に當り周旋矩に適し聲ハ律たり身ハ度たり菓字を左にし徳利を右おし否ハ規矩準繩を左右にし以て衆生の模範となり本尊となり餓鬼大將となりて能く薰陶し其教の功にして密なる誰か難有仕合を唱へざる者あらん議史一日某校の授業を拜觀せしに先生徐々衆生お説て曰汝等常に謹て握扇を爲す勿れ糞尿を發する必ず廁に於てせよ屁を發つ必ず田園に於てせよ若し迫て其違わらざれば必ず紙に包て而後に田園の道に上れ鼻汁ハ必ず紙おて拭ひ手と舌とを以てする勿れ先生の鬼神の如く敬して遠く可らず學校往復の途中ハ必ず徐歩し牛矢を踏て顛倒する勿れと教へ或ハおはやうとぎげんやう

と唱へ或の二一天作の五を授け或の一筆啓上目出度可祝を傳へ或は
 「いろはまはへと」を習ひしめ或は一つとせ——さんのせ——」を歌ふて
 二二三四の舞曲を演せしめ夫より又進で高等に至れば則ち屁の形状
 翠丸及瘤癩玉の大小日月星辰の遊歩織女牽牛伊弉諾伊弉册の陰陽の
 細太廣狹不潔を味噌と化し舟砂を黄金に變じ屁の臭き所以拳骨の痛
 き所以孔丘釋迦耶蘇の腦味噌の多少盜跖五右衛門の手の長短頼朝福
 助の頭の大小より尙を進て天堂極樂の寫眞より八大地獄の測量に至
 り國土河海の分折より麒麟鳳凰蚤虱の解剖に及ぶまで教へて殘すく
 傳へて餘すなし嗚呼ら難有哉議史は乃ち曰はん先生は吾得て聞然す
 る亦し飲食を非ふして功を書見に致し衣服を惡ふして美を胸中に藏
 め富室より用して力を講釋に盡す先生の吾得て聞然するなしと然りと
 雖氣又暴面より鑑察を降せば則ち蓋し先生其人れ目的は往々試験の

廢跡を美にして徒に給を貪らんと欲するま在る者なしと謂ふ味ら
 先生亦して苟も此の如くなりせば蓋し其校や必ず往昔の寺小屋に於
 けるが如く甚だ不規則不完全にして徒に書籍上ま在る文字を傳唱す
 るお止り猶ほ腥臭坊の御經の文句を口傳するが如く其口能く書物上
 の事物を暗唱するお在る耳是を以て四年乃至八年の修業を卒ふるも
 却て迂濶にして活用なく唯少く生意氣心を養成するお過ぎざるの恐
 なしと謂ふ可らま議史嘗て之を知人某お聽く曰余一日某校を訪ひ正
 は寒暖の禮を終れば先生直に二三の生徒を召び命するお事を以てす
 一個は乃ち徳利を携へて酒屋に馳せ一個は乃ち菰を提て豆腐屋に行
 き又他の三五人をして各路を分て雞子を探らしめ忽にして酒來り下
 物之に續ぎ以て議史を饗す議史曰請ふ君僕も關するおく宜く其職も
 従事すべしと先生曰無用の世事を叩かんより須く牛飲すべし生徒の

却て喜び了せり君意と爲そ勿れと酒酣よして或は吟じ或は歌ひ腹已
 お瀧つる比ひ先生議史に謂て曰酒席少艾なかる可らず直に某樓よ登
 り又興を取らんと欲す君の意果して如何と曰僕の囊中一物あし故よ
 敢て應じ難し曰君にして意あらば僕能く其資を辨すべし僕また九月
 分の俸給に領收すべき餘額あり(此時七月初旬)何ぞ心を勞するをせん
 と直よ書を草し二三の生徒をして携へて村長の許よ馳せしむ云々と
 雖し此言殆ど信を置く能はずと雖も地方往々不規則不完全の校舎あ
 る一斑を窺知するよ足らん歎其短を擧ぐれば殆ど屈指するよ違わら
 ざる雖も又其長を擧ぐれば其益亦極めて多く既よ幾多の英雄豪傑を
 製造し正し以て日本帝國に開明の種子を蒔きしは教員其人こそ與り
 せありと謂ひざる可らず今之が長と短とを混淆して二一天作よ平
 地をば可もなす不可もなしと謂ふに過ぎざる歎究意するに地方に

良教員の少きして往々不規則不完全の誹謗を免れざる所以の若し蓋
 し其地位の面白からざるこそ其第一原因なる歎而して何をか其地位
 面白からずと云ふ曰已よ所謂る教員其人は兒童をして聖賢君子たら
 せむ以て國家に開明の種子を蒔くを以て任とする者よして其の俸給
 を問へば僅お十圓内外地位を問へば準官吏なるも其の實甚た輕く村
 民の之れを見る雇人の如く無智文盲の芋堀議員の左右する所となり
 加之其身体常よ自由あらず聞かんと欲することあるも聽く能はず視
 んど欲することあるも見ざる能はず曰はんと欲することあるも言ふ能はず
 而して十圓…嗚呼廉も亦廉なる哉夫れ己よ斯れ如し故に少く氣力あ
 る者は其地位に安する能はず朝よ一良去り暮に又一駿去り馬群遂よ
 空を告ぐるの憂なきよ非ざるかり然りと雖も議史は元來教員其人の
 身は束縛せざる可らざるを主張する者なり故よ百千馬力の壓力を以

せ之を澤庵よし其身をして自由からざらしめんことを欲するあり何
 則ち教員の世事無頓着の者ならざる可らず五官の遲鈍感覺力の薄
 弱なる者ならざる可らず恍惚然たる者ならざる可らざるを信すれば
 亦り故は對手あいてを爲す者の生た餓鬼と死た書籍と頸引くびひきを爲せば可なり
 正直正面生徒を規則の模型かたに箱入はこいれせば可なり學校以外の事ハ黑白相
 辨わきませざるも可なり浴室ゆたのの水練坐上の角力すまきにて可なり否いな可かなならずと
 雖も蓋し教員の静止黙居が本性にて奔走馳騁の其能あた非あらざるなり齊
 東野大自學者の必ず間拔まはつら面と穿てる哉然るを若し之に反して心意は
 常の四方八面を遊歩して其住居を定めされば力を教育の一方に傾け
 ざるの恐あり苟も心意を教育の範圍外に馳せて時勢を追ひ世事は奔
 りて弊の蔓延を憤り土百姓の貧窮を嘆じ朝あの壓制束縛の不平を鳴ら
 して夕ゆふに池塘芳草の香かほにきに輒あく心を動かして亂痴奇騒動を起す如

きことありば其貴重の責任を全ふして聖賢君子を製造する能あたざる
 耳ならず所謂る生意氣野郎亂暴人無法漢でかろ誤製造ごぞうぞうを爲すの恐あればな
 り果して然り十圓も亦不廉なる哉嗚呼果して廉なる歟不廉ある歟將
 た聖賢君子を製造する歟生意氣野郎亂暴人の誤製造を爲す歟其社や
 阿曇其責や權助重且大御苦勞千萬御茶でも……大切の御身分御自愛
 體操專ま活潑に壯健に佛ぶつの神かみ祈いのちり奉たごり候也

政治家

口くちは道徳を説き身に猥醜わうじゆうを行ひ舌したは智識を装ふて腹はらは一物も陽に
 公益を論じて陰かげに私利を掠め表あは民權を賣て裏うらは仕官の口を捜し彼
 演説會えんせつかい新聞の社説を廣告し此懇親會こんしんかいに雜誌の寄書を披露し自重尊
 大伶俐を以て自任し博學を以て自負し其唯我獨尊として大政事家と

真似るの顔色の其傍聴料數錢を收めて以て僅に其口を糊するの内幕
 に似ず其舌を以て口を糊するに妙を得る蓋し落語家演史師も亦稽し
 る及ふ所に非ざるなり抑政治社會は徒小口を開て法螺を吹き大言を
 叩けは則ち牡丹餅の自然に飛來して頬面に當る甘き社會には非ざる
 あり勞せず働かずして義捐金の仕送り衣食する面白き社會に非さ
 るあり餘的の贅澤を鳴らし我儘を責むれば直に下宿屋より一躍して
 國務大臣に登り得可き都合よき場所に非ざるなり否な在朝の政治家
 は觀花の宴を開けば團子を製造して其頬面を叩く土百姓あり月を觀
 花を賞して逸居するも租税を掘り以て其費用を償ふ民草ありて随分
 甘くして且都合よき事あれども野に在ては強て義捐金を募り迫て勤
 化を爲すは非されば花下徒も口を開くも誰か團子を以て其頬面を叩
 く者あらんや揚州に乱痴奇の騒動を演せるも金錢を仕送る土百姓は

非ざるなり終に行燈部屋に擲とかりて青氣を吐くも後悔先立たさ
 るぞかし汝知らずや政治家の糊口の爲め小爲すに非ず詩人の空嘯て
 月落鴉鳴き茶人の舌打鳴らして其風味を愛せるが如く言ふは言われ
 ず止むお止まれぬ一種高尚美妙なる愛好心より來る者なりと云ふ言
 を然るに往々糊口の爲めに政治社會を奔走す故に胃腑飢を告げ腹裡
 不平を訴ふれば則ち法螺も吹かざる可らず大言も吐かざる可らず論
 説も盜まざる可らず義捐も勸化も募らざる可らず諺も所謂る生命の
 以ての物種なり義理人情も何のそのと曰ひぬ斗りの風情もて恬とし
 て廉恥なきの徒即ち政治社會の油蟲多き人として喫驚仰天せしめ
 さるを得ざるあり元來此野郎は南瓜かぼちゃも非ず麩瓜へんたんも非されば焉を能
 る繫て食いざらん然とも他は食ふの道なき歎随分活智いくちなき麩瓜野郎
 ある哉政治社會の決して素寒貧狡猾者の芥溜はぎだめには非ざるぞかし汝等

己も活智なきも自分免許の政治家なり故に亦自ら取る所の主義ありて政黨を設け俱樂部を立て花々敷運動を爲さんと欲する者ならん而して其運動を爲さんと欲せば之は應ずるの費用なかる可らず借問す汝政治家の如何なる方法手術を以て其政黨俱樂部を維持し以て其運動を試みんと欲する歟蓋し例の他輝主義耳義捐主義耳他ふ之が方法目的なきや必せり而して又之が主義如何を問へば蓋し今日の自由明日は保守時としては改進と化し事は因りての帝政と變じて其定りなきは蓋し又祭典主義に非されば則ち義捐主義も外ならざればあり略を眞正の政治家と認むる者も亦往々以上の如き弊風あるを免れず飽瓜野郎の出沒變化定りなきの今更怪むに足らざるなり抑政治社會に斯く油蟲の繁殖を致せしは果して如何なる故乎蓋し政治社會は名譽と利益多き社會たるを妄信して多く一夜作りの生意氣政治家を出せ

しは外ならざるを信するなり然とも政治社會は遺利多き甘き場所非されば牙算まうばんを以て立つ可き社會も非す囊中胸裡共に素寒貧なる者の奔走す可き社會に非ざるなり何となれば則ち政治家は生活の政治界より分離せざる可らざればあり夫れ名譽は人の欲する所なり利益も亦人の欲する所なり然るに汝等も二者兼ねるを得可らざれば何をか取る從來の經驗に徴すれば名譽を捨て、利益を取るや必せり苟も名譽を捨て、利益を取る者とせば放僻邪侈爲さるなり耳噫々亦恐ろしひ哉聞くが如くんば則ち西洋の政治家の政治世界も立て名を争ひ東洋の政治家の政治世界に立て利を争ふ西洋の政治家の政治の世界を以て名譽と生活を以て名譽の世界と爲し東洋の政治家の政治世界を以て名譽と生活の世界と爲すと彼の獨り名も在るも此の名と利との二者に跨またり故に若し兩手に花のそれならで左右に名と利との擷取つかみどりを爲す能はずん

ば賄ち寧ろ名譽を犠牲に供するも利益を得んと欲する慾張政治家多
 きは亦蔽ふ可らざるの事實たり斯く云ふも決して政治社會には生活
 の道にして云ふに非ず志を得て名譽を得れば則ち生活は自ら其名譽
 に伴ふて來る者あり然とも彼の利益を先にして名譽を後にする慾張
 連の如き其之を得んとするの心切なるより唯夢に之を得るを視る耳
 雖も三聲曉を報すれり則ち依然たる在野義捐主義の政治家なり決し
 て下宿家の二階より一躍以て國務大臣の名譽と生活とを得可きに非
 さるあり然るを敢て得んと欲すれば却て其二階より墮落し去て腰を
 抜くの結果を看るお過ぎざるぞかし又之に反して其志利益にあらざ
 りて専ら一種の富裕政治家ありて政治家を以て頗る名譽の職と爲し其
 舉動勉めて政治家に擬し名譽を得る爲めに敢て金錢を吝まざるが
 故に他人も亦利の爲めお政治家と尊崇するを以て其鼻彌々高く其自

惚益々長じ衆議員乃公にあずして誰ぞと其の目未だ政治書を視さ
 るも其口能く自由民權の流行語を吼ゆ而して其主義を問へば滅茶苦
 茶其政略を問へば滅茶苦茶其前途の運動を問へば亦滅茶苦茶彼も滅
 茶此も苦茶滅茶又滅茶苦茶又苦茶然とも此政治家や多く七月以前の
 一夜作りの政治家にして以後は幸に本の本阿味に復するも其山策を
 僥倖して七月以後更お政治家連名簿より上りし者は果して其任を全ふ
 し得る歟議史の唯其滅茶主義を以て社會を滅茶苦茶にせんことを恐
 れて止まざるなり否な苟も社會を滅茶苦茶にする技能氣力あれば大
 出来なるも唯真正政治家の尾に附し其顔色を窺ふて起坐する懸糸木
 偶に過ぎざる有名無實の政治家の招牌たる耳否な純粹の土百姓耳素
 町人耳豈に政治家を以て稱するを得んや曲禮お云く鸚鵡能く言ふも
 鵲鳥を離れず猩々能く言ふも禽獸を離れず滅茶政治家能く囀するも

慶尚を離れすと以へある哉斯る純粹たる士百姓及素町人をして政治
機關を運轉せしむ猶兒童をして爆裂彈を玩弄せしむるが如し随分危険
の任事なり迷惑極る政治家なり嗚呼彼利益と此名譽と滅茶と無法と
奇怪千萬片腹痛き事共あり

書 生

書生の未來の大総國家の柱石なる歟今後の小學授業生乃至市町村役
場の雇書記なる歟將た將來の放蕩卒業の厄介野郎なる歟蓋し英雄豪
傑となりて天下を掌ま運す者の現今の書生なり厄介野郎生意氣漢と
なりて日本の敷潰となるも亦た書生なり而して厄介より成り易く柱
石に成り難し何となれば則ち窮屈々裡に窮屈の講釋を聽かんより
は三弦彈裡と艶聲美音の鏘々たるを聽くの愈れるに若かず鹿爪羅敷

六七六個敷論理を承りらばより六曲屏裡に猫語孤言の喃々たるを
聽ぶの興味は若かず四角張たる正々堂々の書を讀まんより芽出度可
祝の艶書を復讀するも若かず下宿屋に塵埃に塗れて澤庵を嚙まんよ
り寧ろ紅樓紫陌は熊掌を喰ふの快樂に若かさればなり然も異日其富
貴を求めんと欲せば人間到處有青山の初志を變せず根薯を購ふ餘錢
あれば積て他日故山に歸る錦衣を買ふの料も充つ可し若し飲食非ふ
も他日の牛肉を思ひ衾裡獨冷よして他の小支を戀ひ股間の伏龍勃然
として起き一躍以て他の春洞に突入し雲を起し雨を得んと欲すると
あるも縲紲の中に辱否な六尺禪を以て之を禁錮し以て其跋扈を禦
ふ可し必ず他日雲雨を得るの時ありて終に禪裡の者も非ざるぞかし
左は去り乍ら汝の身体は他日國家の柱石たる大切の身体なれば時
としての牛肉一鍋と薄酒一壺の御手輕筋も浩然の氣を養ふは議史の左

祖じて賛成を裁する所なり然ども往々口ふ功若不成死不還を吟じて
 其辱未だ乾かざるに花街に散策を試みて肉莖忽ち乱暴を働か杖を柳
 巷に曳て小悴をして涎汁を垂さしめ其妙味身骨に轉して敢て忘るゝ
 能はず終に冗探しを専攻し書籍代と父兄に欺て懶惰を揚弓場を究め
 月謝を知人お偽て遊蕩と妓樓に講じ入ては則ち院本を下宿屋に播き
 或は擲戯の獨稽古を雪院に試み出ては則ち金策を朋友知己の間に
 運らし寝ては則ち狐猫の美醜を評し某夜愛奴半助の立替へは自惚心
 の彌を熱度を増して已に頂点に達し傾城は眞實なしとは野暮遅不粹
 士の嚙語耳未だ花物の情味を解せざる者豈に共議するに足らんや
 君等若む僕の言を疑ひ一夜同車して彼奴は僕に於ける舉動を觀察
 不可し警見以て僕の嘘を叩かざるを知る可し而して孤的の眼中男子
 あきを悟らず却て孤的の愚弄する所となり鼻を揺めかして女郎様の

御機嫌を取り安に御外観て其歡心を得んと欲し下宿屋の糠味噌汁の
 欄お置き僅に不義の圓助を懐にして紳士豪富は擬し某伯は即ち僕の
 叔父某社長其頭取は即ち僕の兄弟と明言せざるも暗に其意を示し管
 には頭を蔽ふて其唇を顯はし孤的の冷笑擯斥を受くるを知らず噫痴漢
 欺狂人欺將た犬猫欺眞に日本の穀潰耳容赦する限りに非ざるあり獨
 り憐む其父兄の糞を擔き芋を掘り豆大の汗を流して千辛萬苦を得る
 所の資金を擲て放蕩卒業の危介野郎を製造せしを夫れ然り然雖も此
 穀潰や文字を知り道理を究め略々東西の事情に通じ其質活潑其心淡
 薄其目的とする所亦大にして小節を顧み小成は安する者非されば
 一旦翻然悟る所あれば忽ち豹變して其目的を達するの望あしと謂ふ
 可からず果して然ば將來の大総國家の柱石となる者は夫れ亦此人に
 在る欺夫れ亦此人に在る欺蓋し終年面色を白且青みし字書と首引を

辱して世事を知らず終に病魔と戦死する迂濶者と同日の論に非ざる
 歎思ふも無が意見の總仕舞も外からされば囊中無一物金策盡し盡る
 の賤に至れば悟る所あるへければ金策のある限りの牛飲馬食可なり
 木屑休めも亦可なり血氣方も剛し豈に厠裡の手淫に安ずるを得んや
 寧ろ大門を四五年もべ切精液のあらん限りは手當次第片端から其春
 袴を穿つ可し何ぞ血氣方も剛し之を戒むる色も在りと頑語を吼へ疎
 食を飯ひ水を呑み脰を曲て之を枕とし樂亦下宿屋の中も在りと濟込
 を得んや唯其過を改むるに吝ならざるを望む耳赤恥を掻き流して穀
 潰に終らざらんことを欲する耳汝書生は蓋し眞赤の馬鹿に非ず眞白
 の白痴も非されば能く心を静めて諤々の忠言を聴き以て異日天晴國
 家は柱石たるを期せざる可らず獨り憐む可きは書生おして敢て紳士
 を氣取り頭も高帽を戴き美麗なる衣裳を装ひ手おスチツクを携へ口

エレガントを薫らし意氣揚々として道路を横行し蕎麥店天麩羅屋
 の賤して敢て顧みず泥や煨薯に於てをや其服裝の美麗なると其遊戯
 の高尚なると外部の準備已も如此く整頓するも其内部即ち精神的の
 準備も亦已も整頓する歟蓋し先づ外部の整頓を望む者ハ其内部は漸
 く腐敗し去て小成も安し唯充すに怠惰心と依頼心とを以てし剛毅は
 氣力獨立の精神は已も去て痕なく所謂馬失を包むも金繡を以てし
 蒔繪の重箱も充すに糟味噌を以てするの謂にして彼の柑の玉質金色
 あるも志を割けば煙有て口鼻を撲つが如く其中を視れば則ち乾ける
 敗絮の如き黴潰の鍍金野郎にして惡みでも亦餘ありと謂ふ可し都々
 逸子の所謂纏身以敝衣與破袴而胸以錦繡是書生とは蓋し書生の人
 と爲りを寫せし者よして彼の衣肝に至り袖腕に至り敝衣破帽泥履を
 穿き傲然として顧みざるの風ハ實も賞す可くして異日國家の柱石た

る者い矣れ此人お在る歟矣れ此人お在る歟

議員

議史机に對し筆を紙り將に諤々の忠言を書せんとするに方て人あり來り問ふて曰近頃人相會すれば則ち「ギインギイン」と云ふ「ギイン」とい果して如何なる者を請ふ教示を垂れんことをと議史咳一咳莞爾として徐に吼へて曰居れ吾汝に語らん抑所謂る「ギイン」なる者の種類を擧ぐれば曰議員或は偽員曰議院或は偽院曰衆議員或は臭偽員又醜偽員と云ふ曰府縣會議員或は腐兼怪偽員曰常置員或は冗痴員曰村會議員或は損會偽員等なり又此等の議員若くは偽員を撰ふ者を稱して撰舉人或は錢舉人を云ひ議員若くは偽員に撰はるる者を名けて被撰人或は非撰人とは云ふなり而して已は所謂る偽院とい偽員即ち狡獪なる小

本詐偽者の相會して寢理窟を放ち糞議論を發し法縲を囁り囁語を吼ゆる屯所なり臭偽員とは偽員の銅臭と糞臭とを帶ひ其行醜態を極めし人の謂ふり腐兼怪偽員とい其人の心腸腐敗し兼て奇妙奇天列妙不思議の舉動を爲す怪物なり村會議員或は損會偽員とは即ち芋堀偽員はして氣候の順逆乃至物價の高低に因て議論を叩く者ふして即ち氣候の不順なるを論據として痛く役場費を減じ米麥の騰貴するが爲めは大に教育費を減じ去り役場及學校職員の身の常に秋天の如く米價の如く風雨寒暖の變米麥高低の定りなきが如く上下左右せらるゝ所となり爲めに其事務擧らずして一村の損失を來たし諺に所謂る一文客みの百損を爲す偽員にして天を仰て減額を論ず相場書を披て削除説を主張する動物あり冗痴員とい其人や痴漢として有無不相關猫尾の如き冗員なり錢舉人とい金錢を取て偽員を撰舉する貪婪飽くもき姦商

即ち一派の盜賊法律の罪人なり非撰人とは己れ僞員を撰舉せらる可
き人物に非ざる謂に此人や金錢あるも腦味噌は至て少く然ども
議員の職を得んとするの心切なるにより自己の馬鹿を藏はんと欲し
て鼻下を賢明を掛け頭に文明を戴き身に開化を装ひ口に國利民福自
由民權の仮聲を囀り僞黨の團體を作り愚等部を設け徳利主義を取り
折結政略を施し馬鹿を欺き利口に媚ひ往者は追ひ來者は迎へ弱を嚇
し強を諂ひ彼を傷け之を譽め或は笑ひ或は怒り訴ふるが如く怨むが
如く虚語八百巧言八千龍斷を登て姦商を開き仲買人を發して教標を
買ひ壯士を馳せて名譽と威權を賣り狼人をして燈毬を持たせて大敵を
叩かしめ其賣買取引の速なる私窩子の出沒も管からず其用意の周到な
る癡處に手至り其醜態患瘡の癩漫不潔に塗れ牛失を踏つて轉倒せるが
如く其臭氣腐敗の不潔驟雨に逢ふて溢流するが如く其乱痴奇播動は

實は開見するも堪へざる者なり然とも此動物白痴に非ざるも其五臟
六腑の生意氣と猾智とより成り其才識は生兵法なり其器量の畑水練
なり生兵法は終つ大傷を負ふの根本として畑水練は勞して寸功なき
の天頂耳何をか生兵法と云ひ何をか畑水練と云ふ議史嘗て之をコッ
ケト氏に聽く曰商法を茶話お聽て忽ち手を空米相場に出し一敗地に
塗れて身代限を鳴らし農業に書籍を問ふて輒く脚を荒原開墾お納れ
百勞屁と化して骨折損を訴ふる者は生兵法の大傷かり情男を春本に
學て自惚を狐狸社會を試み一瞥擯斥せられて目算全く違ひ賢名を新
紙も得て器量を鯨鱈市場お檢し自失免と喰つて願下忽ち乾く者は即ち
畑水練の無功ありと因此觀之れば八百圓を法律に認めて直お一握し
去らんと欲し意外お金錢を投して僅に其山策を達するも得失相償は
す終に身代を滅茶苦茶お爲し其資格を捧お振りて貧乏神の壓制お泣

顔を爲し蜂の爲めふ刺さるゝ者、即ち僞員生兵法の大傷なり小分小方の諂諛に忽ち自惚根生と生じ直に御利口と變じ金力の爲めに競争の勝を制するも元來胸中無一物にして木偶と一般至極同意頗る賛成の窮音も出てすして赤恥を暴らし馬鹿腰拔の披露を爲す者は即ち僞員細水鍊の無功なり抑此の如き僞員の赤恥を暴らし馬鹿腰拔の披露を爲すも又骨折損を爲すも大傷を受くるも死するも斃るゝも固り其本分月世界の火事と一般更ふ頓着せざる耳ならず却て欲する所なるも若し苟も此の如き動物をして其山策を全ふするを得せしめば議院も充たずに臭僞員、腐兼怪僞員、穴痴員を以てし所謂議院の僞院と變じて山師、姦商、細人、蒙者、詐僞子、狡猾者、馬鹿、痴漢、惡黨、罪人の寄合場、屯所とありて天下國家を滅茶苦茶に爲すの恐あるも知る可らず回顧すれば則ち七月以前お在では壯士横行賄賂公行道路織るが如く道路冠蓋相

接し陰謀密策狡猾詐僞至らざる所なく或は打ち或は傷け或は縲縛に繋かれ或は囹圄に窘められ臭聞を流し醜態を演せし者果して若干をや思ふて此に至れば今尙心膽をして寒からしむ天網果して疎ある歟將た密なる歟今果して所謂僞員なき歟山師なき歟姦商なき歟細人蒙者なき歟詐僞子狡猾者なき歟惡黨罪人なき歟蓋し天網恢々疎よして漏れされば衆議員に法律の罪人を容れざるも七月以前の舉動に因て議員諸氏の價格を徴すれば果して皆真正の政事家なる歟未だ政事の何たるを知らざる二束三文の價格即ち純粹の土百姓素町人なき歟蓋しこれあしと雖も初期國會を終ふるの後は自ら判然たる可ければ今敢て明言するを欲せざるなり故に茲に筆を擱き餘の殘念乍ら國會後に申殘し候不盡

代 言 人

代 言 人 は 法 律 の 大 學 者 他 人 を 代 表 して 事 の 是 非 曲 直 を 訴 へ 他 を 利 し 兼 て
 己 れ を 益 す る 者 な り 喧 嘩 口 論 の 仲 裁 惡 漢 の 罪 滅 つみはろほし を 業 と 爲 す 神 よ り 佛
 よ り 有 り 難 き 御 方 な り 抑 夫 婦 喧 嘩 は 犬 も 喰 り ず 馬 鹿 騷 動 は 豚 も 顧 み
 さ る に 獨 り 代 言 人 の 得 て 以 て 飯 を 喰 ひ 馬 鹿 に 智 恵 を 貸 し て 其 利 も 食
 み 慾 張 漢 よくばりぞと は 法 理 を 説 て 其 説 法 料 酒 を 飲 み 痴 漢 の 依 頼 に 喧 嘩 は 勝 利
 を 説 いて 褒 美 頂 戴 を 唱 へ 常 に 勝 た さ る を 視 て 猶 復 勝 が 如 く 云 々 す る
 の 孟 施 舍 の 勇 あり て 然 る 歟 將 た 他 に 深 意 遠 謀 あり て 然 る 歟 議 史 の 眼
 球 之 を 鑑 定 す る 能 は さ る も 己 は 所 謂 喧 嘩 争 論 の 仲 裁 人 故 に 隣 家 に
 喧 嘩 も 耳 を 傾 け て 一 村 一 郡 の 争 論 の 起 る を 聽 きて 直 に 治 罪 法 を 繕 へ
 其 依 頼 に 應 せ ん と 欲 し 重 罪 漢 に 捕 縛 を 新 聞 小 捕 へ 早 く 刑 法 を 閱 して
 且 其 無 罪 の 道 を 求 め 法 庭 に 出 て の 檢 察 官 と 喧 嘩 小 従 事 し 判 官 に 事

の 曲 直 を 繕 述 し 檢 察 官 有 罪 と 認 れ ば 代 言 無 罪 を 主 張 し 判 官 返 金 を 促
 せば 代 言 踏 斃 つかひは さん と 欲 し 否 な 返 金 の 義 務 な き を 論 じ 其 言 理 有 る が 如
 く 道 あり に 似 た り 實 に 蘇 長 の 舌 堅 白 異 同 の 辨 古 人 の 所 謂 一 語 千 金
 と は 代 言 人 の 謂 あり 現 に 一 語 千 金 を 得 る の 例 少 な け れ ば 乃 ち 斯
 く 叙 じ 來 る も 代 言 人 の 喧 嘩 争 論 の 起 る を 欲 せ る も 非 ず 罪 人 を 愛 し 惡
 漢 を 好 む 非 ず 蓋 し 能 く 其 職 務 を 尽 す の 致 す 所 外 なら さ る 歟 蓋 し
 代 言 人 なる 者 の 自 ら 惡 漢 出 て ず ば 則 ち 糊 口 を 如何 ン 喧 嘩 起 ら ず ン
 ば 則 ち 家 族 を 如何 ン と 曰 ば さ る は 議 史 の 敢 て 保 証 す る 所 なる も 代 言
 人 の 他 の 喧 嘩 小 飯 を 食 ふ 者 な り 失 人 巫 匠 …… 他 の 不 幸 …… 即 ち 幸 …… 是
 を 以 て 議 史 の 代 言 其 人 乃 甚 だ 御 氣 毒 なる も 固 より 其 繁 昌 を 欲 せ さ
 る 者 あり 故 に 今 代 言 人 の 一 身 を 解 剖 して 其 体 内 の 異 分 子 を 社 會 に 示
 す の 有 益 たる を 信 す る も 彼 等 は 喧 嘩 の 道 に 達 し 争 論 の 術 を 長 せ し 者

なれば議史をして敢て曰いんと欲する所を言のしめば彼等の必ず自
己の①の棚を置きて是れ奇貨なり捨つ可らずと忽ち例の喧嘩を法
庭に擔出し名譽回復損害要償と出掛けられたらんふの百日の説法一
放屁の諺を違はず折角の筆耕料も水泡に歸する耳ならず惟一個の膽
玉を潰すの恐あれば詮義の次第を以て例の保存主義を取りて暫く胸
中に保存す可し否を誤てり々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
是非曲直と訴ふる者あり其腹中決して異分子を含む者も非ず議史の
所謂る異分子を含む者とは代言は即ち代言なるも自分免許の代言即
ち三百代言逸業代言なる乎かし抑其人物僅に鏢三百の價直ある逸業
代言者中には其腹黒く其面皮は金剛石質其腹中利刀を有し其舌は蜜
製りて數枚ある等常人に比して異なる處多く而して其招牌を見れば
訴訟鑑定刑事辯護と人をして尤羅敷思はしむるも其蜜製數枚の舌の

能く人の口腹に甘味を感せしめ終に其腹中の利刀を以て他の鬚毛ま
で刈取るを常とす而して其智識及禮義廉恥心の如きの詐僞心の壓倒
する所となりて蜉蝣の鼻毛程もなし故に代言試験の如きは日輪と石
礫を嘗ると一般遠く及ばず是を以て専ら欺騙學を講ず詐僞術を究め
常は怪化の進度を考へ人心の輕薄を察し人民の賢愚を鑑定し巧み其
學を朝野の間に敷き虚を以て實を爲し幻を以て真となし大業なる言
を構へ大層なる熱を吐き巧言令色能く人を釣り己れ鏢一文も出さず
して許多の金を撈ひ了す其爲す所無造作にして其金を儲くるや多し
其技の蘊奥に至り他の生膽を抜き目玉を扭くり以て虎兒一般の巾
着を屠るを得可きあり故に若し此學此術にして彌々蔓延を肆よし底
止する所を知らずんば恐くは刑法治罪法も畢竟之を拒むを得可らさ
る可し夫れ世に政治家なる者は動すれば則ち其言論行政官の癩癩玉

は打當して抜舌は名を被る者あるも獨り欺騙博士詐偽學士の舌の害を爲すの大なるにも拘らず却て抜舌の刑を被る者ある其學其術の巧にして其舌を捕ふるの隙なきは因る欺將た一ひ其舌を抜くも尙ほ數枚の豫備の舌あるを以て到底抜盡す能はざるが爲め欺畢竟するに死して閻魔の法庭に到るは非ずんば其舌を抜盡す能はざる欺悚然舌を卷て之が屍鋒論を草す

壯士

風蕭々兮易水寒壯士一去兮不復還と誓て其言を食せず一諾を重んぢ死して他の屬托を全ふせし轟政荆軻は眞の壯士なり義旗を筑波山に翻へしたる藤田小四郎も壯士なり櫻田門外血如櫻くならしめたる水戸の十七士も亦壯士なり此等の壯士は皆死を輕して義を重む約を全ふ

て敢て死を顧みず以て社會の腐敗を一洗し節義のある所を明示する者に似たり嗚呼是等の壯士は皆眞の壯士なり現今明治照代も出沒横行する壯士も是等の壯士に恥るなき欺社會は腐敗を一洗し得る剛毅快活の士なる欺將た節義のある所を明示し得る忠烈義勇ある者欺今之を其行跡に徴すれば死を視る屍を放が如く人と打ち人を傷く僧侶の木魚阿曇の南爪に於けるか如く四分六分の引割飯に固り我口に適し囹圄は我等の別荘なり地獄に我等の遊歩場固り行くを期する處天下何物か懼るゝ者あらん我等の目には法律なく餘鱈なく豺狼なしある者の獨り義氣耳故より一直線進行主義を以て好死處を求めんと欲する者なり生命の塵よりも軽く義氣の富岳よりも高しと口に任せて出放題を囀するもソリヤ嘘だんべイヤッパリ糊口を勘辨だんべい到底無識無産の浮浪人なる可し咄汝偽壯士の目には法律なく餘鱈なく豺

狼なき耳歟汝等の最も好物たる金銭もなかる可し人間に必用なる禮
 義廉恥もなかるへし備豫かたがへの生命もなかる可し若し汝等をして最愛の
 金銭あらしめば則ち法螺も吹かざるべし大言も叩かざる可し乱暴も
 爲さざる可し死も急がざる可し却て蓬萊瀛洲を奔走して不死の薬を
 求むる者なる可し畢竟するに汝等の所爲の貧乏神の壓制おさへ堪へず已む
 を得ざるの空力味からりきか汝等如何に威張散すと雖も獨り鯨君をして膽玉を
 潰つぶさしむるに過ぎざる耳豈に他に汝等を懼るゝ懦夫たかひやうあらんや故も徒
 ら無怯を吼へて奔走し爲めは食物の消化を速よし飢一等を加へんよ
 り寧ろ路傍に静止して他の憐を乞ふ可し若し果して死の放屁の如し
 とせば望らくは速く死す可し蓋し國家の憂は遊民多きより大なる者
 なければなり然とも死を輕する者の敢て之を廣告せず剛毅の士の亦
 敢て其威力を示さず然るに汝等の如く屠腹するは屁を放つが如しと

切齒扼腕以て徒ら威力を示し乱暴を働くは亦人を嚇おそして貨幣子を迎
 へんが爲めなり口を糊せんが爲めなり汝等知らずや針を以て身を刺
 すも赤血忽ち出て、苦痛を感じるを況や屠腹するに於てをや暫く其
 苦痛を忍ぶも豫備の性命なきを如何せん汝等の如く死を鼻に掛け大
 言を曰ふ吼ゆる者の却て怯夫耳屠腹の愚か自腹を斬るも亦能はざる可
 し故曰死スル死スルハソリヤ嘘うそメンペイ矢張り糊口の勘辨かんべんメンペイ
 と毛唐氏曰恒産なき者の恒心なし苟も恒心なければ放辟邪侈せざる
 なき而已と今日汝等の舉動を視て始て毛唐氏の法螺を叩かざるを知
 れり汝等の如く己に恒産なく隨て亦恒心もなく放辟邪侈爲ざるなき
 而已罪に陥りて死せんより寧ろ潔く屠腹して死するの愈れるに非ず
 や斯く吼へ去り吼へ來らば汝等或は囁らん毛唐氏曰はすや恒産なく
 して恒心ある者は惟士能するを爲すと余は壯士なり士族なり恒産な

きも恒心なきも非ざるなりと曰然矣々々然矣は即ち然矣なりと雖も
 現も放肆邪修爲するなきに非ずや若し汝等敢て士族なりと自稱せ
 ば速に其恒心を回復し腕力鐵拳の文明の花に非ず腕力を以て事を爲
 す可き時代も非ざるを悟り以て其過を改むるに敏あらざる可らず然
 らざれば猶ほ瘦士なり死族なり寒族なり若し死せし則ち累々然とし
 て妻家の狗を學び赤恥を晒らし政界の油蟲となり日本の毒蟲とあり
 て徒ら社會を妨を爲さんより寧ろ櫛木以て腹を屠り汝等の期する所
 の地獄に轉居す可し妙法蓮華經——南無阿彌陀佛——汝等僞壯士
 地獄へ行き我が爲めも聶政諸君を弔ひ鏘々然又六道の辻を觀は復た
 昔時の屠狗者あらん鏘々然我が爲めに謝して云へ明天子上も在り以
 て出て仕ふ可と鏘々鏘々焉南無阿彌陀佛妙法蓮華經

改良家

演劇の改良可なり風俗の改良可なり婦人の改良可なり人種の改良可
 なり衣食住の改良可なり文字の改良可なり鯨縮の改良頗る可なり馬
 鹿白痴漢の改良最も可なり阿房生意氣野郎の改良亦甚た可なりと雖
 も議史の殊に改良家の改良を望む者なり蓋し現今改良家の口は甚た
 調法都合よき仕懸の口おして昨日は風俗の改良を吼へて今日は婦人
 の改良と出掛け又明日の衣食住の改良も早變して復た敢て風俗の改
 良婦人の改良を囀らず更に文字の改良と化し人種の改良と變じ又疾
 くに衣食の改良に遷り家屋の改良も轉て未だ其一の改良の端緒たお
 開かざるに彼の改良の已に陳腐も屬し去りて擯斥せられ此改良物の
 最早腐敗し了し蟲之お生ずと爲して蔑如せらるゝを常とす嗚呼何た
 る阿房ぞ此阿房こそ眞の改良して滅多矢鱈も新奇を好む輕躁の浮氣

を放逐し以て眞の日本人を改良回復せしめざる可らず蓋し現今の日本社會の僅に明治廿四年間も於て歐洲社會が二百餘年の久しき糞汗垂れて得たる改良進歩を一足飛よ一攫お得たる事あれば上毛髮眼色の改良より下不潔味噌の改良に至るまで百事千物の改良を要するの固り當然ありと雖も限りなき千百も管からざる事物を一時に改良し得て馬鹿白痴漢の忽ち利口才子となり糞尿は直に味噌醬油に豹變し得可らざるをも拘はらず徒口も改良々々又改良と唱へて神出鬼没定りかく之が改良に周旋盡力せざるれみならず衣食住の改良を唱へて其改良家自身は却て舊來の家も在て古態の服を纏ふて口に澤庵を嚼み入ての則ち舊態を守り出ては則ち新装も變じ其定りなき猶其口と腹とに於けるが如きの可笑も亦餘りありと云ふ可し抑人種改良論を主張すれば管も口に吼ゆる而已ならず自ら衆に率先し種々人種改良の

方法を設けて手當り次第……に敢て専ら製子業に従事せざる可らず(議史も時として)御助力申さん然るに今や人種改良論の果して何處くも在る睡る歎將た死する歎抑又全く製子の業に勉勵して己に腰を抜きし歎蓋し己お陳腐に属し去るを以て蔑如せしならん口に税なしと雖も何ぞ其輕佻浮薄口舌の定りなくして徒お新奇を好むの甚たまきや嘘々改良家の所爲概ぬ此の如し故に餘縮及び馬鹿白痴漢其他百事千物の改良を要すと雖も先づ殊お改良家の改良を爲して而後其改良の業に従事せしめざる可らず識らず議史の吼ゆる所非歎

婦人

頭も馬糞を糺き身も春夏秋冬吉凶弔賀の狀を装ひ喪服と禮服と相隣し官装と素服と相並び盆と暮と共お來り英と佛と相接し塙と獨と相

交り一身上に萬國衣裳共進會を開きし如き奇怪の服裝に意氣揚々たる者即ち開化の婦人ある歟將た文明界の怪物歟己に其体や蕉いばの如し其体内も亦此の如く純ならず心の常に東西南北に遊歩して其住居を定めず視て見す聞て聽へず食て其味を知らず否か其年記僅ふ二八なるも下口の早已に味を知りて馬大的も猶ほ辭せず況や道鏡的をや此怪物や心ま班點ありて粹ならずさるにも拘はらず口を開けば則ち吼へて曰男女同權を實ま奇怪千萬片腹痛かたはらき事共あり而して今其吼ゆる所を聽くお曰天の人を生ずるや男女の異なるに因て其の愛憎を異ふする者よあらず男は乃ち二個の墨丸と一個の肉莖とを有し女ハ之に換ふるよ一個の臭洞を以てするの差ある耳故お墨丸と臭洞と論な人生るれば則ち男女の別なく各天賦の權利自由あり而して其權利自由なる者ハ股間凸凹の異あるに因て決して其輕重多少の差あらざる

亦抑人間と動物は誰れか之を生み誰れか之を養ふや釋伽も孔子も耶蘇も餘鱈も皆妾等の臭洞より匍匐はづし來りて其手も成長せしむらすや未だ曾て樹股ままたより湧出せし者あるを聽かざるあり故お婦人權利自由の却て男子ハ優るあるも劣ることなきは得て知る可きなり是を以て男子として他の婦人を轉ばすの權利あれば則ち女子も亦他は粹士も轉まはさるへの權利あり夫として一婦を守らざるの自由あれば則ち婦も亦姦通勝手次第の自由あり男も權妻あれば則ち女も權々夫を有するも可なり進むも退くも睡るも起るも轉ふも立つも妾の自由勝手なり故も苟も夫にして妾の氣に食はぬことありせば踢斃げすも可あり放逐するも亦可なり情郎いんざうにして妾の癩癩玉は觸るゝことありせば張飛ていすも握屁にぎりを放投すも亦何の妨かあらん天下男子甚た多し其欲する所も隨て轉々する耳豈亦一男子の爲めお玩弄物あそびもの視せらるゝ野

縁未開の婦人は髪を倣ひしや今の婦人の皆腰拔き馬鹿なり阿房さ
 り權利自由の何なるを知らざる蒙者なり妾の敢て此の如き卑屈の婦
 人と伍するを欲せざるなり噫あゝいかに梓いかに小乗て太平洋に浮らん妾に従はん者
 は夫れ丹次郎其人歟と曰ん斗りの風情ありて傍人あきか如く其輕
 佻浮薄なる其髻と均く輕氣球を颯風に飛ばすか如く生意氣を養成し
 て醜聞を四海に流すの女丈夫の常歟抑亭主を髻下しりのしたに敷て勝手に姦夫
 を拵しらへ恣に穴隙を鑽て不貞腐を行ふは果して權利自由なる歟頭に馬
 糞を戴き手を男子と相携へて西洋料理店に登るは果して文明開化な
 る歟將た頭に島田番しまたばんを戴き身に白襟紋附しろへもんつきを纏ひ女大學を講し小笠原
 流を行ふは果して蠻風なる歟議史は紺緋を以て飾せず紅紫は以て纏
 服に爲らず緇衣しやういおの羔裘素衣かすせうそいの麗裘と焉乎矣の嚙語たがごを贊成する者
 亦非ざるも身に萬國衣裳共進會を開くが如き奇怪の服装も亦敢て贊

成するを得ざるなり寧ろ頭を國粹を保存し否島田番を戴き身も保存
 主義を装ふ質素なるを取らんと欲するなり何則ち猫比ねこひ鞞くわは狐比
 鞞きつの如くなるも其不遜ふとんあらんよりの寧ろ固なれの理窟なればあり而
 て其固なる者は元來教令閨門を出てず事饋食の間に在る野蠻翁の屁
 理窟も憤染し窮窟々きうくつ種の世界即ち一家の小天地に踞躑くわく盤居して其足
 未だ戶外に出てず故に其思想も亦未だ戶外に出てず其事務の専ら夜業
 を在りて人なき里の蝙蝠と一般世間知らずの生人形常なまがた錦繡きんこうも其身
 を包み幽暗たる深闇に安坐して手足を勢せず獨り眼球を動搖するも
 過ぎざるあり之を反して中人以下の者に至りては常に引火ひき奴函ぬかん的てきに
 矮屋わいあるを知りて雲くもふ聳ゆる太館たいかんあるを知らず未だ夢に東京を視さ
 る者況や巴理ぱり龍敦りゆうとんをや其足能く戶外に出ずるも貧乏徳利ひんぱつとくも新道の酒
 店みせに伴ともひ拭ぬぐを携へて横町の米屋に目參し襤褸はらを本町の典物店てんぶつに殺す

に過ぎざるあり其欲する所は演劇寄席あり美衣金釵なり南爪燒薯なり其口能く喰ひ其舌能く囀り隣家の放屁も評して残すなく向三軒兩隣の飯菜も種々の批評を降して味噌を不潔と認ひ彼は阿多福此の怪面的と論し餓鬼の喧嘩の固り啄を容れ芥溜の中へも啄を容れて搦立藪を突へて蛇を出すを常とし特に長ずる枝の子を孕むの術も過ぎざるなり嗚呼婦人の社會の奇怪の社會なり可憐の社會あり窮窟の社會なり是れ蓋し毛唐氏の窮窟ある古訓に慣染するの致す所歟果して然らば孔丘は我婦人の仇敵なり孟軻は我姉妹の爲め罪惡を作りも悪人なり然れども彼れ婦人が自ら斯る苦痛なる社會に住して其苦痛ある所以と感せず却て之を以て永住の郷と爲し進取の氣力なきお坐せまれば非ざるなり而して無氣力の婦人非ずんば則ち輕佻浮薄の風船なり不眞腐の生意氣なり斑文的の怪物なり嗚呼果して天下議史の妻

と爲す可き婦人なき歟若し無しとせば己まん耳然れとも婦人改良論者は今後如何なる教育を垂れ如何なる婦人を製造せんと欲する歟議史の英人を作るを欲せず又佛人を作るを欲せず況や卑屈及生意氣女を唯眞正の日本の婦人を製造せんとする耳米人エライ氏曰余の日本に向て希望する者は日本と云ふ制度風物の土臺に上に腰を据へざる可らざること是なり而して建國の土臺は教育に在り去れの教育を布くに當りて其目的は眞正なる日本人を製出することを勉めて英佛及日本と云ふ如き斑点兒を製出することを避けざる可らずと議史の左袒拍手して然矣然矣大然矣と連呼する耳識らず婦人改良論者及御婦人方の果して如何と爲す歟

文明の翫間者開化の燈毬持自由の間屋民權の本尊輿論の本家公議の
 元素伶俐の親玉知者の隊長と尊崇し奉る萬物の靈たる人間は頂天に
 位する者の果して誰そや新聞記者即ち是なり蓋し記者てふ名稱の知
 者の符合賢明の綽號なり而して其任とする所は天下の耳目となりて
 離婁の明師曠の聰を以て世界各國の事々物々を聞見し上は王公相將
 の乱痴奇騷動より下は阿爨の放屁權助を拳去來に至るまで論じて殘
 そなく一本の筆能く地球を轉覆し一章の文能く天下を左右す人をし
 て人間の仕事も非ざるかを疑はしむ嗚呼人間の極人として新聞記者
 たるを得の榮も亦榮ある哉毛唐氏曰聖人は衆諸の耳目衆諸の聖人の
 体と果して然らば天下の耳目たる記者の已に聖人……聖人を以て自任
 する記者……人間の頂天も位するも亦以へあきに非ざるなり世人若
 し之を疑ひ一日の閑を得て一新聞社を訪ふへし麒麟の伏す攸濯々

たり鳳鳥屋ま在り嘸々たるを聞見す可し然れども聖賢と貧乏野郎の
 異名なる歟御氣毒も頑子の陋巷孔窮の曇々たると一般常も大黒君
 惠比壽兄の擯斥する所となり社内は平素貧乏神の横領する所となり
 素寒貧の御揃車夫馬丁の屯所の如く熊公八的の行に似たり故聖人の
 議史書籍を訪ふて屢々之を見る生た聖人即ち記者の状態は殆ど視る
 お忍ひさる者あり蓋し記者たるもの平素貧乏神と同居するも少く
 得る所あれば直に青樓お囃語を叩き花街に木刀を休すめ終に人質と
 なりて行燈部屋に禁錮せらるゝは彼等の常態何の耻か之れあらん彼
 等は眞の禁錮委員として囹圄の別荘に在りて繫鎖の身となるの固り
 彼等の本分更に意も介するなし況や行燈部屋の勞を慰するに適當な
 るに於てをや彼等の磊々落落常も小節を顧みず義を欠き理に戻る固
 り珍しからず況や恥人情をや然りと雖も彼等の已も聖人平素論する

所の民権の焼直し自由の蒸返し係ると雖も昔人の糞船の束縛と載
 き短襖を着て四角の漢語を吼ゆるが如きも非ざるあり又其説は舶來
 む非されば則ち仮聲取次受賣に非されば則ち拔萃轉載も過ぎずして
 自己の腹より出生せし者は蚤の罌丸虱の鼻毛程もなしと雖も昔人の
 無鉄砲論偏徹固説を唱へて無價の空言を賣るに似ざるなり法螺と大
 言とは彼等の主義切賣と仲買との彼等の商法固り怪むに足らずと雖
 も述べて作らず信して古を好む焉矣乎の頑語を叩かざる耳ならず述
 へて作り信して古を好まざる者なり彼等の筆の自由なり我儘なり都
 合よき筆あり其能く左右縦横は回轉すること淀の河湍の水車も管な
 らず頻に餘鱈を保護して滅多矢鱈に褒言を呈し以て其返禮を促し保
 護の筆耕料を得んと欲するも終に越中禪と變すれば則ち其有無に拘
 ららず其醜を評き其非を並べて殘すなく苟も氣も喰はぬことありせ

ば遠慮會釋なは筆黜し服讎し一飯の徳の必ず償ひさるも匪嘗の怨も
 必らず能く報ず故に彼等を味方と爲すの固とより可あり苟も敵と爲
 すの眞平御免被らざるを得ざるなり必竟するに貨幣子の社會の仇敵
 なり若し記者をして其仇敵も廻返せしめば手當次第の復讎を爲さ
 る可し實は記者をして握らしめんと欲する者の貨幣子なり記者の貨
 幣子を愛する固より怪むも足らずと雖も獨り疑らくと記者の常は口
 を極めて奴隸を罵り筆を極めて奴隸を誹り其論綽々然として奴隸の
 外に横行するが如きに似たりと雖も其實は亦貨幣子の奴隸たるを免
 れざるを是れ他なし其論高しと仮定するも其見卓なりと見倣すも人
 之を讀まざれば則ち河虎の屁も若かず寧ろ楷糞紙と何ぞ擇はん故も
 勉めて看客は意に副ひ其御機嫌を取らんと欲する心配に出ずる耳天
 下國家は恒言は例の法螺耳招牌耳豈も他あらんや因此觀之は法螺も

悪口も大言も民權は切實も自由の假聲も文明の燒直説も開化の蒸返論も怪むに足らざるなり義理人情を省みざるも亦決して怪むに足らざるあり已に所謂る記者は聖人常人と異なり其四肢五体を解剖せば亦必ず常人に異なる所多き得て知る可きなり蓋し心に七竅あると舌の二枚あるとの勿論其他種々雜多の異分子あるや必せり嗚呼果して法螺悪口兼大言は大隊長自惚鐵面皮の大博士勝手我儘手前味噌の本尊ある歟將た自由の間屋民權は本尊憐惻の親玉知者の隊長輿論の本家公議の元素なる歟記者自ら其良心お問へ噫々眞に智者の親玉其智や及ぶ……及ぶ可らず

藝娼妓

誰れか云ふ藝娼妓廢すべしと野暮の極不粹の至り四角の頑語無情の

囁辭耳蓋し藝娼妓は國家の花欠く可らず無かる可からず買ふ可し藝妓囁ばす可し花魁買ふ者ありて賣る者あるは經濟學の通則誰か敢て不字を加ふる者おらんや否か所謂る四角の頑語を叩く野暮連無情の囁辭を吐し不粹人即ち自分免許の道德先生ありて敢て不字を其首に冠せんとす議史は敢て其不字の冠を撤去し了せんと欲するあり抑人生の一大目的は獨り快樂を取るに在る耳而して人生の一大快樂は肉體の快樂即ち溫柔郷里の右も出する者なしと云ふも固り過言に非ざるを信するなり何となれり則ち瑤樓金閣華の如く聳へ三千の佳嬪仙娥艷粧花の如く一肌一容態を盡し妍を極め人をして恍惚たらしむ若し夫れ夕陽西山も沈て終日の勞を慰め團月代て斗牛の間お徘徊するに至れば絃歌千曲銀燭萬点煌々たる不夜城中秦娥美を競ひ楚妍を爭ふに及す誰か魂飛ひ肉消せざらん況や校書の鏘々絃を弾じて妙音を

弄すれば幫間鑿々鼓を敲て其音も和し一歌一聲敲鼓と彈絃と妙音と
 鉦聲と鏘々鑿々として心蕩し魂飛ぶの興味も於てをや又泥んや窈窕
 たる佳嬪を六曲屏裡三蒲團の上も擁して比翼連理の情味を専らにす
 るを得るも於てをや真に一双の玉手の接して身を死し半点の紅唇の
 嘗めて心を融かし一語の一語より情益々深く一會の一會より痴彌々
 加はり翡翠衾暖にして遊郎冬夜の長を樂み鴛鴦枕涼ふして冷漢夏霽
 の短を怨み雨ふ車を飛ばし風も歩を移し曉雪にの流連し朝雨にの歸
 るを忘る無比の樂土仙境は別天地なり夫れ此の如し故曰其快樂も在
 溫柔郷里の右に出ずる者あらんぞ果して人生の一大目的の快樂も在
 りとせば溫柔郷里の一快樂場は欠く可らず無る可らずと云ふも何の
 不可か之をあらん而して其情慾も迷ひ色界に溺るゝの害固り少しとせ
 ざるも藝娼妓營業の主眼は唯人をして能く悦ばしめ人をして能く樂

ましめて金錢を得んと欲するも在る耳決して人を害し人を賊せんと
 欲する故意ある恐ろしき者も非ざるあり然るに大丈夫にして其快樂
 を買はんと欲して却て自ら其害を醸生す是れ自業自得自ら作せる孽
 耳自ら作せる孽の他の之を如何ともするなく自ら暴ふ者の共に言ふ
 あるに足らずとは毛唐氏の名言故に議史は斯る自暴者に向て共々語
 るを欲せず唯其隨意に任する耳亦敢て關せん乎倉庫を打破し去て他
 の丹鼎に容るゝも身代を限り臆を繋すも溺るゝも沈むも自暴者其人
 の勝手次第なり況や學識あり爵位ある者に於てをや何となれば則ち
 苟も學識ある者もしては賤女れ爲めに弄する所となりて送夢の覺る
 期なく夢中に世を渡る者の如き馬鹿なり白痴あり何房なり狂人な
 り人間の屑なり到底社會の益を爲す者にあらず其餓するも死するも
 固より其分豈も敢て關せんや何ぞ不都合あらんや夫れ金錢の社會の

循環物彼を出すれば此に入り此を去れば彼に就く日本の範圍を循環するも何の不可か之れあらん而して馬鹿阿房の常に金錢を利用せずして害用するは餘り珍らしき事にあらずして藝娼妓に害用せざれば亦他も害用する耳蓋し貨幣子の元來馬鹿何房の懷も安ずるを欲せず故に貨幣子として其懷を去て他の利用者の懷に轉居循環せしむるの得策たるを信するなり到底馬鹿と何房との如何ともする能はざれば豈に心配するも及ばんや何ぞ驚々云ふに及んや斯く吼へ去らば藝娼妓あり故に馬鹿を生じ又何房を生ずと嘲する者もある可けれど此れ數の免れざる所にして此理窟として詮結れば終に極端に走り貨幣子なければ盜賊も亦く人殺もなく警察も裁判も官獄も必用を要せず甚た都合よかる可きも個の獨り口に言ふ可くして到底行ふ可らず總て事物は理窟通りにならざる者にして完全無欲の社會は決して求むる能は

されば少く斟酌せざる可らず抑又所謂る自分免許の道德先生の道德の盾を振回ひして例の四角の頑語無情の囁辭を囁るなる可けれど現今の社會の道德論は暫く無用なり否な藝娼妓存廢論の偏頗の理窟なり其盾と爲すも足らざるあり何とあれば則ち試み活眼を社會の大勢に放て上○○を始め紳士と唱へ政治家と稱して國家の爲め盡力する親方株の所爲を通覽せよ必ず道德の罪人多きを認む可し況や寄零以下の人間の不道德の甚しき視るも忍びざる者多きも於てをや彼の雪も親み蝨を友とする堂々たる令嬢すら道德を乱たして醜聞を四海に流す者少なからざるも非ずや然るに獨り最寄零以下ある賤女及馬鹿阿房を責むるに道德を以てす依怙偏頗の誤論と謂はざる可らず勝手我儘の理窟と謂はざる可らず世間知らずの橋面説と謂はざる可らさればなり斯く吼へ去るも決して道德は無用なりと云ふに非ざる

なり道德に至極結構なり人間社會は欠く可らざる品物なり然とも他の親方株は不道德を矯正して道德社會たらしめ而後藝娼妓も及ぶことを順序ならめ父たる者乱暴醜態を極めて子の放屁を責むるの少く穩當ならざるも非すや夫れ然り然るか故に廢娼妓の事たる到底六個敷仕事にして自分免許の道德者流の屁理窟糞議論を以て能く成じ得る仕事に非されは無用の心配を爲さんより寧ろ退て御茶でもあがれかし思ふも汝等の如く獨り道德あるを知りて世間を知らされば少く不道德は分子を含む者は皆盡く廢し去らんと欲し彼の不道德なり廢せ可し此も不道德なり亦廢す可しとせば人生の大目的ある快樂的は盡く撤去し了し甚だ不愉快面白からざる社會を造出し終は一簞一瓢陋巷に青氣を吹て樂亦其中に在りと恬居に至らされば止まざる可し議史は亞聖と稱せらるゝも賢人君子と稱贊せらるゝも斯る窮窟なる面

白からざる渡世眞平御免被らざるを得ざるなり咄汝自分免許の道德者よ人世を殺風景不愉快の社會を爲すの愚を學はんより寧ろ少く奮發して人生の大目的たる快樂を取り以て生命の洗濯をなせ已に所謂藝娼妓營業の主眼は人よ快樂を與へて金錢を得んとするの商法に外ならずして決して人を害し人を賊せんとする故意ある恐る可く惡む可き者に非ずして甚だ親む可く愛す可き者なるぞかし議史は茲に彼の道德者流の藝娼妓の最も害と認むる者耳を擧て其辨護を爲す而已之が益を擧ぐれば亦屈指するに違わらずと雖も須く長文を渉るの恐あるのみならず僅よ以上嘯へずる所よして復た彼の道德者流の口をして敢て開かざらしむるも足るを信するが故に敢て茲に饒舌立るの勞を取らざるあり又議史は無智の藝娼妓に向て惡口も叩かず忠言も呈せざる耳ならず彼の鑑札を所持して其技を賣り賦税を官衙に納

めて其業を營む公明正大ある天下の一商人即ち我親愛なる藝娼妓様
方に代て頑語を囁する野暮的藝辭を吼ゆる不粹人連に向て聊忠言を
呈する耳教示の勞を取る耳自分免許の道德先生果して如何んサヨナ
ラ

著述家

天爵可なり人爵亦結構なり而して天爵を修めて人爵之に從ふとい蓋
し子輿氏の法螺耳現に汝子輿氏は己に天爵を修むるも常より人爵の擯
斥する所となり東西南北を奔走して仕官の口を求むるも終お見當ら
ず故に其七篇より不平を洩すも惜哉人爵なければ其説徒より長くして殆
ど空文たるを免れざるに非ずや之より反して假令へ天爵なきも人爵を
得れば則ち天下を掌上に運らば口を開けば則ち其言法とあり律とあ

りて輒く其志を行ふを得可し聖丸ある者其志を行はんと欲せば須く
人爵を求めざる可らず若し志を得されば假令へ其説の徒より長きに涉
るも空文に属するも苟も國家を憂ふる者は其志を述へて國家の爲め
に盡さざる可らず蓋し仲尼曠野に空腹を抱へて春秋を作り屈原石を
泪羅より懷て離騷の遺物より其不平を洩らし韓非秦より繫鎖の身となりて
説難孤憤顯はれ其他臆者の兵法盲人の國語等皆其類なり議史の元來
天下を掌上に運らすを好む者なり貧乏を好まざる者なり故に嘗て貧
乏神と絶交し九尺二間の裏店より一躍以て天堂より登らんと欲し朝も
餘門を叩き夕も閨安を訪ひ以て其意を述るも生來諂諛學に暗きを以
て遂に其意を達する能はず此蜂共み取らず徒に骨折損に属し去り其
心常お鬱結する所あり漸く發して諤々忠言とありしに外ならざりき
蓋し著書の事たる其感する所凝て終に書お發する者なり抑現今著書

の多き未だ嘗て視ざる所にして明治の社會の眞に著書の社會あり而して其著述家の意は又以上云々する意に出ずる歟蓋し其意亦各異ありて一文以て天下を左右し一章以て人心を上下せんと欲する豪傑もあらん能く他の嗜好も應じて専ら囊中を暖めんと欲する錢取面もあらん豪傑の志す所固り可なり錢取面も亦可なり議史の同業相憐むの情を以て決して惡口を叩かざるあり唯錢取面其人に對して聊忠言を呈せんと欲するに過ぎざるなり曰其著書の目的果して金錢を貪るに在りとせば先づ宜く姦商も就て其姦術を叩かざる可らず曰序跋の可成的澤山にして其文の巧拙に關せず有位者及名聞ある者ならざる可らず竊盜の著述家の奥技必ず爲さざる可らず然とも其技五右門盜匠に及ばざれば却て暴露するの恐あり故に勉めて古書を盗む可し曰燒直蒸返は亦固り著書家の常なり然とも其術を巧にする能はずんば寧

ろ余輩嘗て之を聽くと冒頭を附して其全文を轉載し末尾も少く己れの意を添ふ可し曰貨幣子は常に危険の處に住む故に直に之を擒にせんと欲すれば勉めて危険の處に闖入せざる可らず曰勉めて慷慨愛國家を氣取り己れの卑劣貧乏の極めて秘密おせざる可らず曰一書を著述する毎に他の名稱を借りて其名を異にせざる可らず著書は價直おくして曰他の横奪する所となる憂なきも版權は必ず有せざる可らず幾分の價直を増す益あればなり曰自ら出版せば必ず洋綴金字入の美本お製し裏紙數枚を挿入して勉めて其容量を廣大にすべし新聞雜誌の廣告の奮發して長文を掲げ藥の能書も三舍を避くる大法螺を叩く可し斯く叙し來らば汝等錢取面は必ず囁らん汝陳腐漢の吼ゆる如きい已お數年前に百も承知二百も首肯忠言等とい片腹痛き事なりと議史曰汝等の己に之を知るの議史も亦百も承知二百も首肯然ると敢て

云々する所以の者は程能く汝等錢取面を慚殺せしめんとの故意は外ならざるそかし汝天歎羅屋さん紙屑を以て心とし金玉を以て衣とし油蟲の油を以て誤魔の油と誤魔化さんより寧ろ奸商の伍に入り小毘店を開て偷夫を釣るこそ却て利益なれ鼠の天歎羅は我其狐を欺すを知る蝦の天歎羅は我其甘を知る書籍の天歎羅に至ては我敢て食ふを欲せざるなり然るを嗚呼おも書籍の天歎羅を以て敢て眞人間お食はしめんと欲す是猶ほ小學の餓鬼にして韓歐蘇柳に文法を説き孔丘釋迦をして熊公八的の説法講義を聴かしめんと欲するが如きあり豈に敢て聞かんや己に現金著書多しと雖も概ね天歎羅否な紙屑楷糞紙一般價直ある者極て少し夫れ如此く二束三文の書籍多き所以の者の彼の一小冊子は洋航費を辨じ僅一週間に數千圓の筆耕料を得るを聞て忽ち著書の利益あるを首肯し減多矢鱗は文字を並へて英雄碩儒の眞

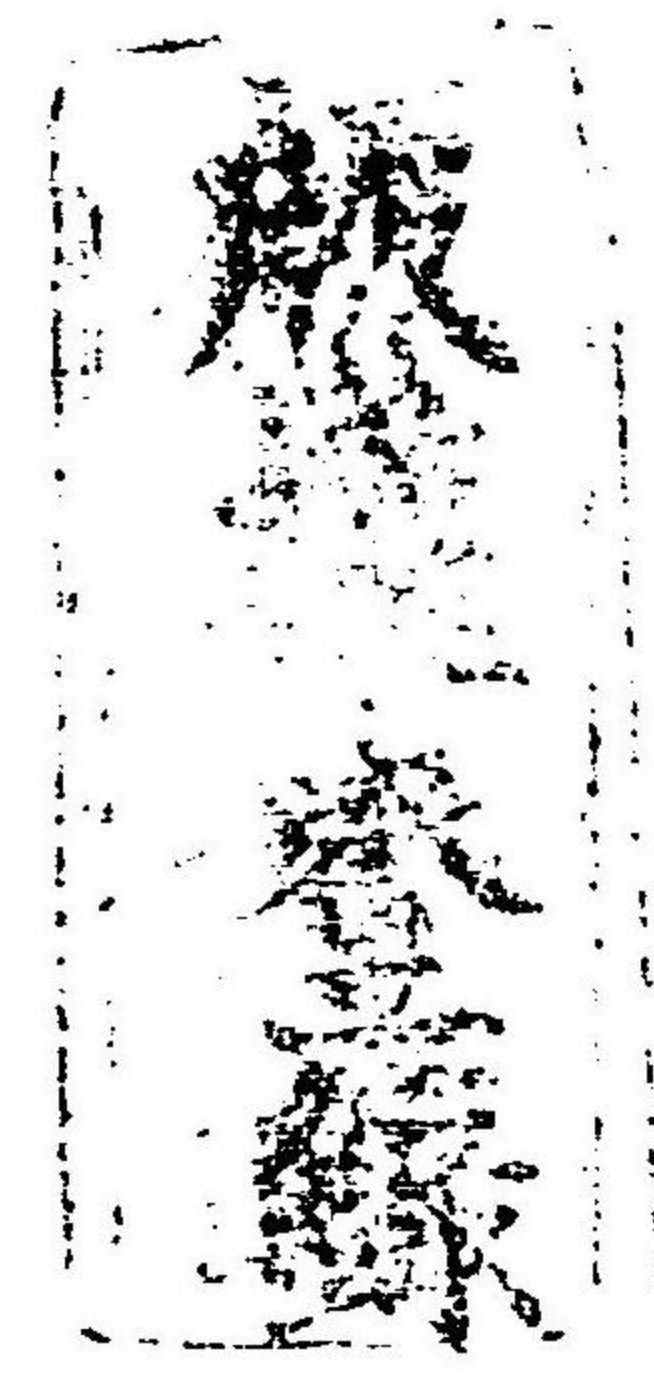
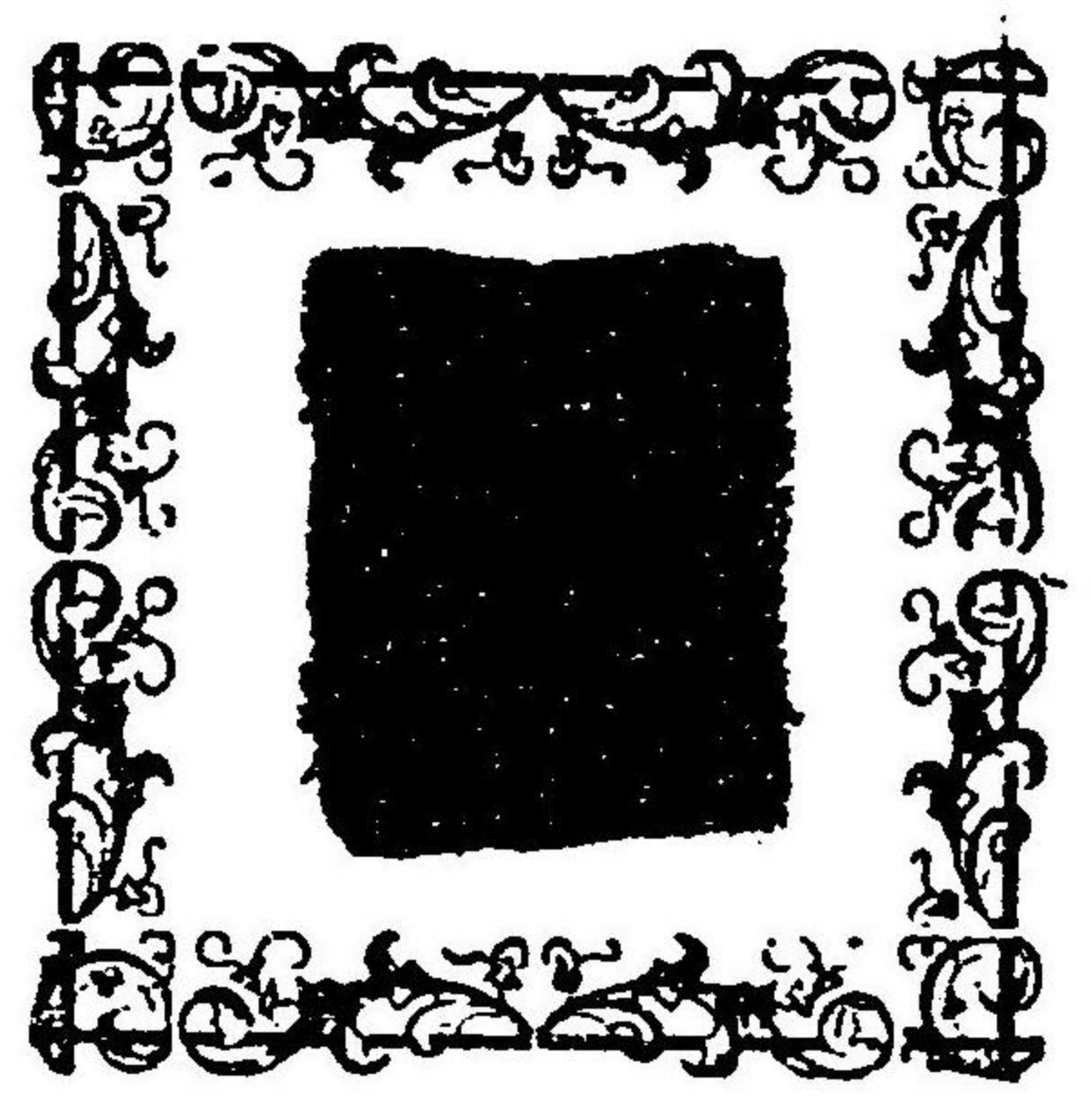
似を爲し以て巨利を一攫し去らんと欲するも到底鶻の眞似を爲す鴉と一般終に敗を取て止まん耳英雄碩儒の眞似は尙ほ可なり盜跖五右衛門の眞似を爲すは大に不可なり孔子春秋を作りて乱子賊子懼ると議史の二束三文の書多く出て、洛陽市上の紙價をして高からしむるを懼るゝと偷夫の天歎羅茶漬を食ひしむる者あるを憐むと同時に彼の外貌を衒ひ容量を張り以て他を欺かんとする學者否な天歎羅屋さん多きを嘆せずんば非ざるなり識らず議史も其類を免れざる欺手を拱して默念たり

明治廿三年... 出版... 印刷... 定價二十錢

明治廿三年十月廿四日印刷
明治廿三年十月廿六日出版

定價二十錢

版權登錄

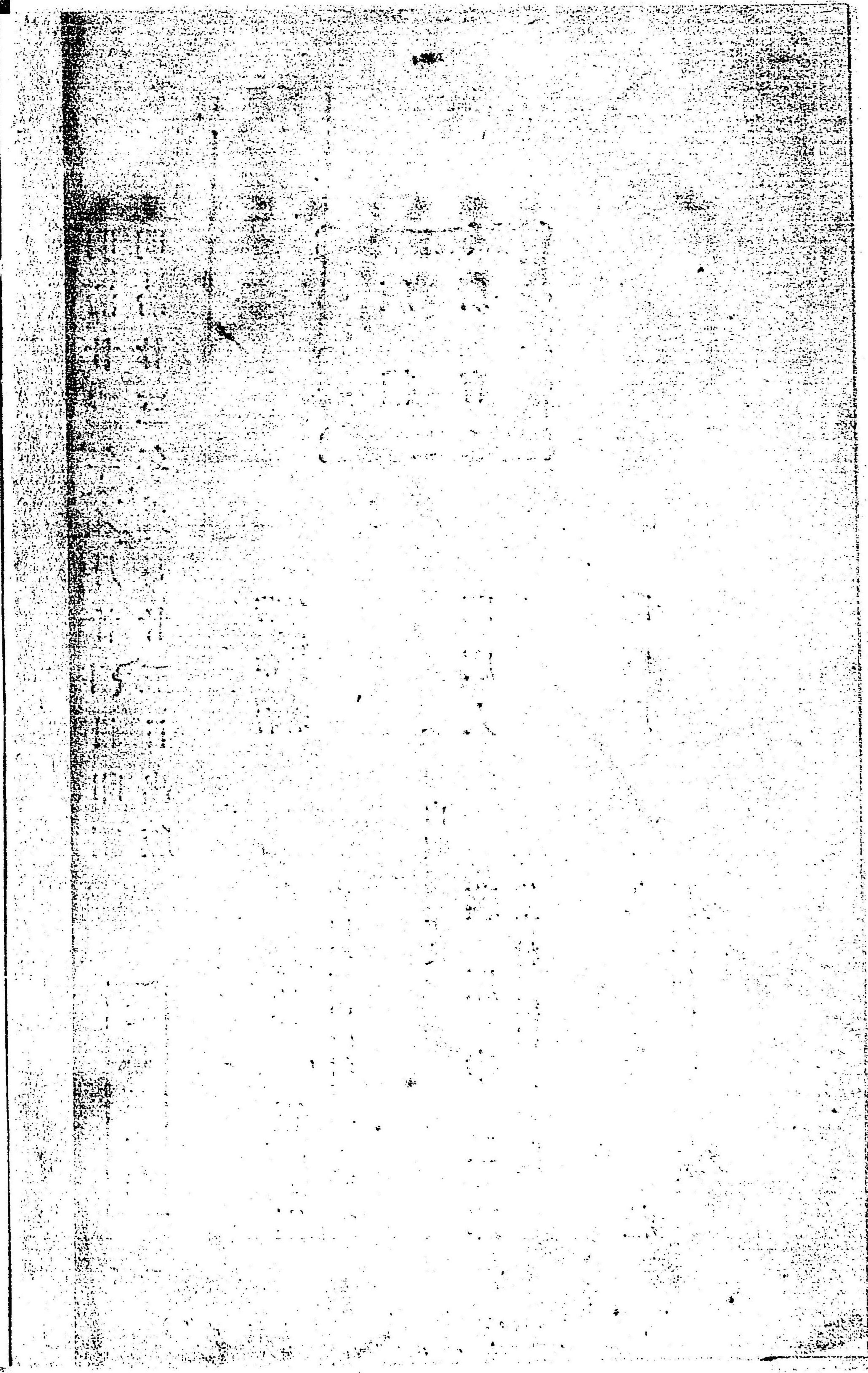


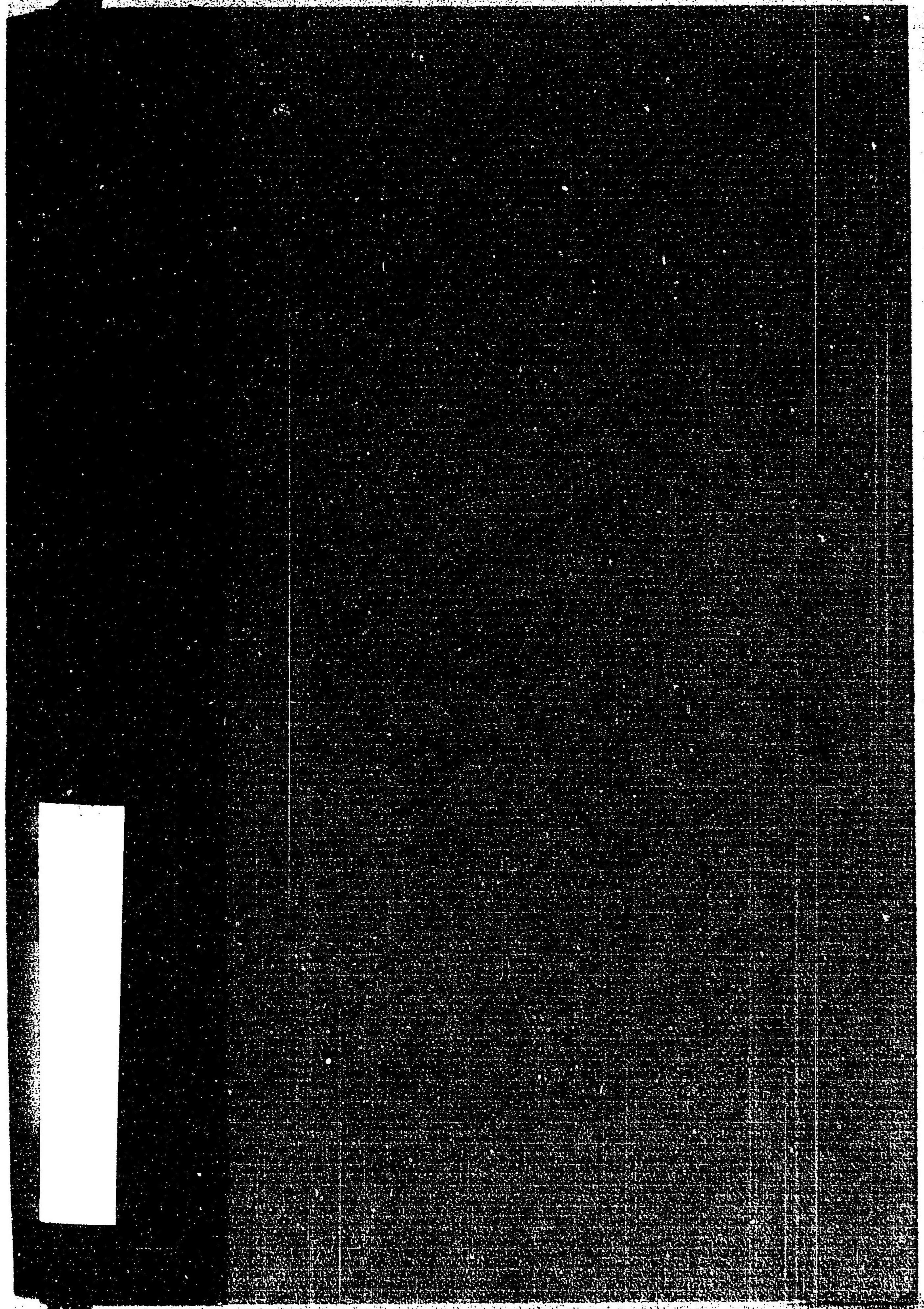
著作
兼發行者

山梨縣士族
小林正則
東山梨郡中牧村新廿五番地

印刷人
山梨縣平民
萩原幸二郎
住吉村西梨郡第二百四番地

印刷所
九合社
東京神田區錦町三丁目八番地





A small, white, rectangular label or sticker is positioned vertically on the left side of the dark area. The label is blank and contains no text.

特51

844

猛 虎

国立国会図書館

039720-000-7

特51-844

猛虎

小林 正則/著

M23.11

BDA-0312

